

サイコアナリティカル

英 文 学 論 叢

—英語・英米文学の精神分析学的研究—

第 34 号

(望月満子先生及び山本昂先生 追悼号)

The Journal of Psychoanalytical Study  
of English Language and Literature

No. 34

サイコアナリティカル英文学会

The Society for Psychoanalytical Study  
of English Language and Literature

# 目 次

1. 望月満子先生及び山本昂先生のご逝去を悼む .....1
2. *Ulysses* に見る現代の危機と救い  
—反転した Oedipus Complex を通して— .....23  
松山 博樹
3. *A Masque presented at Ludlow Castle, 1634* における  
the Lady と Sabrina の精神的な結びつき .....39  
桶田 由衣
4. *More Stately Mansions* に見られる Oedipus Complex の消滅 .....55  
松尾かな子
5. “The Magic Barrel” における Leo の成長と Salzman の存在意義 .....71  
有働 牧子
6. SYNOPSIS .....85
7. 研究ノート .....91  
倉橋 淑子
8. 執筆者紹介 .....97
9. サイコアナリティカル英文学会会則 .....99
10. 『サイコアナリティカル英文学論叢』 投稿規定 .....102
11. サイコアナリティカル英文学会の図書出版に関する規定 .....104
12. 編集後記 .....105  
小園 敏幸

## SYNOPSIS

- 1 . The Reversal Oedipus Complex in *Ulysses* .....85  
Hiroki Matsuyama
- 2 . The Psychological Connection between the Lady and Sabrina  
in *A Masque presented at Ludlow Castle, 1634* .....86  
Yui Oketa
- 3 . The Dissolution of Oedipus Complex in *More Stately Mansions* .....88  
Kanao Matsuo
- 4 . Leo's Growth Inspired by the Idea of Salzman in "The Magic Barrel" ...89  
Makiko Udou

## 望月満子先生及び山本昂先生のご逝去を悼む

会長 小園敏幸

今年度即ち 2013（平成 25）年度は、サイコアナリティカル英文学会にとって、大変悲しいことが起こってしまいました。望月満子先生が 4 月に、そして山本昂先生が 12 月に亡くなられました。ご冥福を祈り、謹んで弔意を述べさせていただきます。

望月先生も山本先生も共に、常任理事会や理事会では学会運営に関する有益なご意見を、また大会では研究発表者をねんごろに激励し、私共は他のどんな学会に参加するよりもプラス思考の盛り上がりを感じ、優越感を覚えたものです。

お二人の先生のご他界により、我々会員は寂しさや悲しみに耐えて、この学会を盛り上げて行こうと改めて心に誓っている次第です。

第 2 代会長の望月満子先生は 2013（平成 25）年 4 月 11 日に 95 年 10 か月余の生涯を終えられました。

望月先生は、サイコアナリティカル英文学会を設立した 4 か月後の昭和 49 年 12 月 1 日の第 2 回理事会で入会を承認されました。第 5 回理事会（昭和 52 年 12 月 4 日、於 舞子ビラ）で会員の推挙により昭和 53 年度から理事に選出され、また、第 6 回理事会（昭和 53 年 12 月 3 日、於 ノートルダム清心女子大学）で理事の中から推挙により昭和 54 年度から常任理事に選出されました。第 14 回理事会（昭和 61 年 11 月 8 日、於 ホテル大阪ガーデンパレス）で会長に推挙され、昭和 62 年 4 月 1 日から平成 8 年 3 月 31 日までの 9 年間会長の任を果たされました。また、平成 8 年度以降、第 3 代名誉会長に選出されました。望月満子先生が会長を 3 期 9

年間されましたが、その間、私は事務局を担当し、望月先生とは学会の将来展望や運営方針について何度も電話で語り合いました。また、年1回発行の『サイコアナリティカル英文学論叢』の印刷代が当時は非常に高く、現在の約3倍の金額であったために、望月先生が会長をされていた期間には論叢発行の度に10万円の寄付をされておりました。顧みれば、平成元年9月24日（日）に第7回常任理事会を京都市左京区の望月満子先生のご自宅で開催したことも、つい先日のように思い出されます。

第3代会長の山本昂先生は2013（平成25）年12月19日午後3時46分、肺炎のため千葉県野田市の病院で死去、88歳でした。

山本昂先生は当学会設立の発起人兼理事の一人でした。第6回理事会（昭和53年12月3日、於 ノートルダム清心女子大学）で常任理事に選出、平成13年度まで理事および常任理事をされ、昭和54年7月18日にホテル南海で開催された第1回常任理事会の議長を務められました。第14回理事会（昭和61年11月8日、於 ホテル大阪ガーデンパレス）で副会長に、第23回理事会（平成7年10月14日、於 日本大学）で会長に選出されました。従って、副会長を昭和62年度から平成7年度までの9年間、会長を平成8年度から13年度までの6年間、そして平成14年度から平成25年12月19日に亡くなられるまで約12年間の長きに亘り顧問を務められました。この学会は創立40年になりますが、先生はこの間ほとんど毎年寄付をされてこられました。先生が会長であられた期間は、私が事務局を担当しており、学会運営のことで度々電話をさせていただきました。山本先生が金城学院大学に勤務されていたころ名古屋市守山区北山にお住まいで、緑地公園の近くに住んでおられました。そしてそのころ私の家も山本先生と同じ守山区北山で、金城学院大学に近い翠松園の一角に住んでおりました。山本先生は長崎県の壱岐という離島のご出身で江田島の海軍兵学校時代のことやその同窓会でのこと等その当時の喜怒哀楽をよ

く話されておりました。

望月先生と山本先生のご逝去により、当学会の草創期を知る会員が本当に少なくなっていました。当学会創立のため、発起人会が昭和49年7月20日（土）に神戸のパルモワ学院で開催されたが、今田準造先生（創立者）、三戸雄一先生、佐久間保治先生、伏見繁一先生、林暁雄先生と私が神戸駅で落ち合い、太陽がキラキラ照りつける真夏日に会場に行ったことを今もはっきり記憶しております。発起人は総勢15名、フロイドを日本に最初に紹介した当学会の初代名誉会長の大槻憲二先生、初代会長の今田準造先生、副会長の三戸雄一先生と佐久間保治先生、伏見繁一先生、荻野目博道先生、本多三七先生、池本喬先生、山本昂先生、元田脩一先生、土居琢磨先生、加藤宗幸先生、金田正也先生、林暁雄先生、小園敏幸の15名で発起人会兼第1回理事会を開催しました。月日の経つのは早いもので、あっと言う間に40年が過ぎてしまいました。発起人会兼第1回理事会に出席した者で現在の生存者は林暁雄先生と私だけになってしまいました。

望月満子先生と山本昂先生のお二人の思い出が走馬灯のように浮かんで名残は尽きません。望月満子先生及び山本昂先生が理事会や大会で大いに意見を言われ、真剣に議論をし合ったことや、お二人のお目を細めて微笑むまるで園児のような笑顔が臉に焼き付いて忘れることは出来ません。

望月満子先生及び山本昂先生のご苦勞とご功績により、海外にまで知られるようになった当学会が今後益々発展し、世に貢献出来ますように努力致すことをお誓いして、謹んでご逝去を悼み、ご冥福をお祈り申し上げます。



第2代会長 故望月満子先生

## 第2代会長 望月満子先生（略歴）

- 大正6年5月28日生（京都府出身）
- 昭和10年3月 京都府立京都第一高等女学校卒業
- 昭和13年3月 同志社女子専門学校英文科卒業
- 昭和16年3月 同志社大学文学部英文学科卒業
- 昭和16年4月 同志社大学文学部英文学科助手
- 昭和20年4月 梅花女子専門学校助教授
- 昭和23年4月 同志社大学文学部英文学科専任講師
- 昭和24年1月 梅花女子専門学校教授
- 昭和25年4月 梅花短期大学助教授
- 昭和26年7月～昭和27年6月  
米国シカゴ大学人文学部英文学科留学
- 昭和31年4月 梅花短期大学教授
- 昭和33年4月 同志社女子大学助教授
- 昭和36年4月 同志社女子大学教授
- 昭和42年4月 同志社女子大学大学院文学研究科（修士課程）教授
- 昭和50年4月 同志社女子大学大学院文学研究科（博士課程）教授
- 昭和53年4月～昭和57年3月  
同志社幼稚園長
- 昭和57年4月～昭和59年3月  
同志社女子大学学芸学部長兼大学院文学研究科科长
- 昭和59年3月 同志社女子大学定年退職
- 昭和59年4月 神戸女子大学教授
- 平成7年3月 神戸女子大学退職
- 平成7年4月 勲四等瑞宝章受章
- 平成25年4月11日 逝去。95歳。

研究業績については、トマス・ハーディやジェイムズ・ジョイスに関する著書・学術論文の具体的な資料が手元にないため割愛する。

望月満子先生の人生訓：「いかなる困難に落入っても希望を持って待て」

## 望月満子先生の思い出

常任理事 湯谷 和女  
(神戸女子大学英语英米文学科教授)

望月満子先生にお会いしたのは、大学卒業後、高等学校で13年間英語教師として勤務した後、神戸女子大学修士課程英文学専攻の1期生として入学した1986年(昭和61年)のことです。先生は大学院に英文学専攻を設置するために神戸女子大学に招聘され、京都から神戸まで通っておられました。謹厳実直なお人柄に触れ、先生を心から信頼し尊敬して現在に至りました。

修士課程の1回生の時にはJames Joyceの*Dubliners*を、2回生の時には同じくJoyceの*A Portrait of the Artist as a Young Man*を教えていただきました。授業中に書き留めたノートがあったのを思い出し、久しぶりに読んでみると、次のような記述がありました。

- ① *Portrait*の主人公、Stephen Dedalusが友人の前で美学論を語り、級友を驚かせたが、その美学論はAristotleの*Poetics*とThomas Aquinasの美学論が融合されたものであったこと。
- ② Joyceの文学はrelationshipが大切であること。
- ③ 個々は宇宙(完全無欠な力)とどのようなrelationを持つべきか。(Thomas Aquinas)
- ④ 悲劇はどんなに涙をそそられるものであっても下品なものであってはならないこと。
- ⑤ 古典的な気分、落ち着きがあるからこそJoyceの文学が成立する。“Stream of Consciousness”は、なにかclassicalなものを下敷きにすると、それが支離滅裂にならずに済むこと。
- ⑥ Acceptance= 順応。例えば「死」は、「死」そのものにも順応で

できれば問題はないが、癌患者などの場合はそれに順応できないから苦しむのである。Stephen の場合は家の人とうまくいかなかったので疎外感を感じ、孤独感に苦しめられたこと。等々。ノートに目を通してしていると当時の様子がリアルに蘇ってきて、初心に立ち返り、怠ることなく研究に邁進しなければならないという思いに駆られます。

1992年（平成4年）に、修士課程に次いで英文学専攻博士後期課程が開設されましたが、「マル合教員」の先生がいてくださったお蔭で許可が下りたようなものだ、と関係者が言うのを耳にしたことがあります。そのようなご自身の功績には全く頓着されませんでした。神戸女子大学での先生のご功績は大きく、大学の「隅のかしら石」といっても過言ではありませんでした。

先生は創意工夫に長け、着想に富まれた方でした。英文学科の研究誌 *Tabard* は今年で創刊 30 年になりますが、その名付け親は先生です。*Tabard* は *The Canterbury Tales* で巡礼者たちが集まったロンドン、サザークの *Tabard Inn* に由来しています。カンタベリーへの道すがら巡礼者が退屈しのぎに一人ずつ話を披露したように、私たちが研究生生活の道すがら、互いの研究成果を発表し合い、切磋琢磨して研究の途を進んでいく、まさにぴったりと符合する実に上手なネーミングであると感心させられます。

先生は私に様々な研究の道を開いてくださいました。サイコアナリティカル英文学会、同志社女子大学の夏期講座、*The Jane Austen Society*（英国ドーセット）はいずれも先生ご紹介くださったもので、私の研究生生活に欠かせない大事なものです。サイコアナリティカル英文学会が舞子ピラで開かれた時、私は先生に連れられて初めて大会に出席しました。神戸女子大学が当番校になった時は、先生とご一緒に大会の準備させていただき、会員の方々とも自然にお近づきになることができました。先生はサイコアナリティカル英文学会のことをいつも心に掛けておられました。大会の研

究発表は、精神分析学の理論に基づき正しく分析されることが何より大切だと考えられ、大会に講師の先生をお呼びして勉強会の形式を取られたこともありました。

授業中の先生の教えは今も頭に残っており、事あるごとにそれが蘇ってきます。「学際研究」の図解がとても分かりやすかったこと、「人類の進歩」の軌跡は吊り下げられた蚊取り線香のような形であったこと、など不思議な程、頭に焼き付いています。先生はよくおっしゃっていました。人類の進歩は振り子運動に似て、ある時右に大きく振れたかと思うと次には必ずその反動で左に大きく振り戻される。しかし、その運動はいつも一定のところに留まらず、運動を繰り返しながらスパイラル状に上っていく（発展していく）、これは経済も同様で、好景気の次は必ず不景気来る、不景気に陥ってもいつかはまた好景気が巡ってくる、これが先生の持論でした。

先生はいつも率直に正直にお話してくださるので、それが心地よく、素直な気持ちでお話を伺うことができました。私が神戸女子大学に勤務するようになってからは、ますます先生とご一緒させていただく機会が多くなりました。毎週火曜日に先生の研究室で昼食会を持ちました。メンバーは先生と、非常勤講師の武田美代子先生、私の3人でした。武田先生は、望月先生のかつての教え子で、本務校の梅花女子大学から火曜日だけ神戸女子大学に教えに来ておられました。先生はヨークシャーテリアが大好きで、当時はブックちゃんという愛犬とともに通勤されていました。先生にとってブックちゃんは単なるペットではなく、コンパニオンでした。だから可能な限りブックちゃんと一緒に外出されました。

先生と私は師弟関係というよりは友達のように楽しませていただくこともありました。神戸港から「フェリーさんふらわ」に乗船し、船中泊で別府まで行き、湯布院まで旅をしたことがあります。また、豪華レストランシップ「ルミナス神戸」で神戸の夜景を楽しみながらディナー・クルーズをしたこともありました。尊敬してやまない先生に対して、背筋を正して

折り目正しくお付き合いさせていただくのが当然なのですが、胸襟を開いて友達のように何事もフランクにお話しして下さるので、つつい私も緊張が解けそれに甘えてしまいがちでした。

1995年1月17日に、思いもよらぬ大震災が神戸を襲いました。阪神淡路大震災です。成人式で帰省した学生がちょうど神戸に戻って来た日の早朝のことでした。地震のためにすべての交通機関がストップし、家屋は倒壊したままで、その年度の授業が再開されることはありませんでした。先生にもお会いできないまま卒業式を迎えました。そのような中で、先生は万難を排して卒業式にご出席になりました。前日に神戸に来られ、その夜はポートピアホテルで宿泊し、私も一緒に一泊して式典に出席しました。ホテルに他の宿泊客は見当たりませんでした。翌朝、朝食を取りにレストランに行って不思議な光景を目にしました。ホテルは復旧作業員の宿泊施設に変わっていて、食堂は炊き出し場のようにごった返し、メニューも高カロリーの単純なお料理しか並んでいませんでした。復旧活動の自衛隊員の生活拠点になっていた大学の体育館を、応急的に卒業式会場に設営しなおし、やっとのことで卒業式を終えることができました。新年度を迎えても、大学前の道路は瓦礫を運ぶトラックがひっきりなしに行き交い、その土埃で喉を傷め、講義をするにも声が出ない状態が続きました。結局、先生は地震をきっかけにご退職なさいました。

このような騒動の中、同年4月に先生は教育研究功勞により勲四等瑞宝章を受章されました。先生が退職なさってからは、毎週火曜日の夜に電話でお話しさせていただくことを楽しみにしていましたが、先生が骨折してご入院されたことがあり、徐々に先生とのお付き合いに制限がかかってきました。その後のご様子は、京都聖マリア教会信徒の野島敦代氏が、同志社女子大学英語英文学科京都支部発行の「京都支部ニュース・レター」第13号に追悼文を寄せられていますので、お読みいただきたいと思います。

先生のご教授とご親交を心から感謝し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

## 望月満子先生をお見送りして

野嶋 敦代（同志社女子大学 1968 年卒）

初めて望月先生にお会いしたのは京都聖マリア教会（聖公会）であり、私が女子大に入学する直前のことでした。それ以来、学生として、卒業後は英文科研究室の助手として、また同じ教会の信徒として、約半世紀にわたってずっと親しく接して頂きました。

研究室での先生は私達助手に対し、その中に入って気さくにお話になったり、ご自宅に招くなど、何かと気配りをして下さいました。身の周りはいつも整然と片付いていて、まさに収納の達人でした。

先生は同志社女専時代に受洗され、戦時中も熱心に教会生活を続けられたと伺っています。マリア教会でも毎週、礼拝をご一緒にし、ご退職後は一婦人として婦人会の会合にもお出になっていました。先生のご性格は、こうした信仰生活に基づいていて、自立の精神や信念を貫くという強さだけでなく、「周りの人と共に幸せになる」ことを求めるものであったと思います。

戦争末期、教育から英語が消え、教え子の梅花の英文科の学生達も工場に動員された時、戦後は英語が必要になると信じた先生は配属将校に掛け合い、作業前に授業をされました。終戦まで、空襲下でも続けられたそうです。

お住まいのコープ鴨川に事務所を設けた暴力団の退去を求める裁判でも先頭に立たれました。勝訴は得たが、部屋の買い取り費用で行き詰る中で、お母様の遺産を提供されました。今は「望月ルーム」と名付けられ、集会所として交わりの場になっています。

晩年は耳が遠くおなりで、事故による骨折もあったのですが、ヘルパー

さん等の支えを得て、自室での独り暮らしを数年間、続けられました。私も外出のお手伝いに定期的に伺いましたが、鍵の開け閉めから銀行の手続き、ペット店での愛犬ビリーに関する依頼など、すべて人を頼らずご自分でなさいました。

最後の五年間は、コープ鴨川のお部屋からと同じ景色が見える樋ノ口町の老人ホーム「花の家」にお暮らしになりました。屋上から、比叡山、大文字山、同志社の方向を眺め、時折お誘いしたドライブでは教会、コープ鴨川、栄光館めぐりを喜ばれました。

「花の家」の「最期まで人間としての尊厳を守る」という理念に立って、心ある血の通ったケアを受けられお元気にお過ごしでした。しかし、今年に入って体力の衰えが見られるようになり、平成25年4月11日午後、美しいお顔で穏やかに天に召されました。95年余の長いご生涯を、前を向いて真っ直ぐに生きてこられたとの思いがしています。

今、先生は、岡崎の京都聖マリア教会礼拝堂の納骨堂でお眠りです。礼拝欠席が気掛かりだった先生も、今はもう何のご心配もなく、皆出席で主日礼拝を私共と共になさっておられます。



第3代会長 故山本 昂先生

### 第3代会長 山本 昂先生（略歴）

大正 14 年 12 月 15 日生（長崎県出身）

昭和 21 年 4 月 福岡外事専門学校（英米科）入学

昭和 24 年 3 月 福岡外事専門学校（英米科）卒業

昭和 24 年 4 月 九州大学文学部英文学科入学

昭和 27 年 3 月 九州大学文学部英文学科卒業

昭和 27 年 4 月 活水中学校・活水高等学校教諭

昭和 27 年 7 月～昭和 29 年 4 月

フルブライト奨学金第 I 期生として留学のため活水  
中学校・活水高等学校教諭を休職

昭和 27 年 9 月 ベイラー大学大学院（英文学専攻）修士課程入学

昭和 29 年 5 月 ベイラー大学大学院（英文学専攻）修士課程単位満  
了退学

昭和 29 年 4 月 活水中学校・活水高等学校教諭に復職

昭和 31 年 4 月 金城学院大学文学部助手

昭和 31 年 6 月 金城学院大学文学部専任講師

昭和 32 年 4 月 金城学院大学文学部助教授

昭和 41 年 4 月 金城学院大学文学部教授

昭和 44 年 4 月～昭和 50 年 3 月

金城学院大学文学部部长

昭和 44 年 11 月～昭和 60 年 3 月

学校法人金城学院評議員・理事

昭和 45 年 4 月～昭和 60 年 3 月

金城学院大学大学院文学研究科教授（併任）

昭和 50 年 4 月～昭和 56 年 3 月

金城学院大学大学院文学研究科科長

昭和 60 年 3 月 金城学院大学退職

昭和 60 年 4 月～平成 5 年 3 月

活水女子大学・活水女子短期大学学長  
学校法人活水学院理事・評議員

日本私立短期大学九州支部理事  
平成 5 年 4 月 活水女子大学教授  
平成 6 年 3 月 活水女子大学退職  
平成 6 年 4 月 女子聖学院短期大学教授  
平成 7 年 4 月～平成 13 年 3 月  
女子聖学院短期大学学長  
平成 7 年 4 月～平成 24 年 3 月  
学校法人聖学院理事・評議員  
平成 11 年 4 月 聖学院大学人文学部教授  
平成 12 年 4 月～平成 15 年 3 月  
聖学院大学副学長  
平成 25 年 12 月 19 日午後 3 時 46 分、肺炎のため病院で逝去。88 歳。

研究業績については、ロバート・ブラウニングに関する著書・学術論文の具体的な資料が手元にないため割愛する。

## 山本 昂先生との思い出

事務局長 小城直子（熊本大学非常勤講師）

山本先生を思い出すとき、残暑厳しい8月の常任理事会で麻のスーツを身に背筋をのばして席についていらっしゃる姿、そして、年次大会のときに前方の席で研究発表を聴いていらっしゃる背中です。会議では客観的で温かみのあるご発言、時には学会のために厳しいご意見でもって、役員を導いてくださいました。研究に対する情熱も熱く、わたしがテネシー・ウィリアムズを研究していることを気にかけてくださり、関連する新聞記事の切り抜きをそっと渡してくださったこともありました。ご自分の研究分野だけではなく、会員の研究についてもよく把握されており、歓談の席でそのような話題になることも多かったです。日本の歴史に関する知的好奇心もお強く、歴史的建造物を訪れるために、資料や書物で下調べをされている最中だとメモ帳を見せてくださったこともありました。また、園芸がご趣味ということで、夏は水遣りがホントに大変なんだよと静かに笑っていらっしゃる姿が印象的でした。お孫さんたちとの英語でのメールのやり取りのことも楽しそうにお話しされていたことも昨日のことのようです。学会に関するご意見としてお葉書を頂戴していたときも、素敵な絵葉書と記念切手との組み合わせに、先生の美的センスが溢れておりました。千葉にお住まいということで、小園先生の研究室に落花生まんじゅうを送ってくださったこともありました。袋にピーナッツのキャラクターが描かれたユーモアあふれる銘菓で、院生や職員と分けあっていただきました。

繊細な根っこのようにきめ細かく、まさに学会を温かく見守っていらっしゃった山本先生を代表するようなエピソードの数々だと感じておりま

す。

長年に亘って毎年ご寄付もいただき、心身ともに貢献してくださった功績に熱く御礼申し上げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

## 父・山本 昂の人生

長男 山本 清（印西市議会議員）

（「父・山本 昂の人生」と題して書かれた以下の掲載分は、山本昂先生のご長男である山本清氏（印西市議会議員）のブログ「エキサイティング印西市」からの抜粋であることを付記する。）

山本昂の20代は、日本が焼け跡から立ち上がる昭和20年代。極度に食料が不足した時代だった。壱岐の島の実家の田畑は農地改革で小さくなり、仕送りは期待できない。まず、福岡外事専門学校（現在の福岡大学）で英語を学び、さらに九州大学文学部英文科に入学。その間、進駐軍でアルバイトをし、高校（現在の福岡大学附属大濠高校）で英語の非常勤講師をした。下宿では、仲間と調達した食料を分け合って自炊した。下宿仲間には、後に日本の環境医学のパイオニアとなり、生活習慣病の長期追跡コホート研究を福岡県久山町でスタートさせた九州大学医学部名誉教授で元国立循環器病センター総長、尾前照雄がいた。山本と尾前は、終生の友となった。

昭和20年代（1945年から1954年）は、戦前の天皇制を軸とした日本の旧体制が崩壊し、日本人のほとんどが価値観の再構築を迫られた。山本昂も例外ではない。海軍士官となるために教育を受けた1943年から1945年。「お国のため」「天皇のため」に死ぬことを望んでいた。海軍兵学校は、当時の日本の中では開明的な教育を実践していたが当然、国家主義の限界があった。実際、海軍兵学校の2年先輩の73期は半数が戦死、1年先輩の74期も相当数が戦死している。昂は、海軍兵学校に入学する際、1年浪人したために戦死を免れた、ということができる。

英語を学び、進駐軍でアルバイトをした日々。アメリカや西洋文化への

関心からキリスト教（プロテスタント）の教会に足を向け、キリスト教徒になった。

毎週日曜日にはプロテスタントの教会に通うようになっていたが、ある日、牧師に「教会の奨学金制度があるので、応募してみないか」と言われた。アメリカの教会から、日本で苦学する学生のための奨学金がもらえる、という。応募し、採用された。

もらってみて驚いたのは、この奨学金制度の仕組みだった。リードさん、というケンタッキーの田舎の主婦が、月に10ドル、山本昂の学資を支援する、という形の、支援する側、される側双方の顔が見えるスポンサーシップ。現在、日本でも海外の子どもを支援する「フォスター・ペアレント」などをNPOが推進しているが、そのような仕組みが戦後直後の日米間にあった。

1950年代前半、アメリカ留学した際に、山本昂はクリスマス休暇にリードさんの家族を訪れた。また、1950年代半ば、山本昂と婚約中だった志垣利子（しがき・としこ、後の山本利子）はテネシー州に3年間留学しテネシー州立大を卒業したが、長期休暇にはケンタッキーのリード家をたびたび訪れ、ホームステイさせてもらっている。1970年代には、山本昂は自分の家族をケンタッキーに連れて行き、リードさんに会わせるなど、リードさんと山本昂との国境を超えた友情は終生続いた。

リードさんとの文通を通して、昂は、アメリカの市民社会の奥深さを感じることになる。エリートでも金持ちでもない、普通のおばさんが、へそくりを工面して遠く離れた日本人の苦学生を支援する。日本は、つい5年前まではアメリカの敵国だったにもかかわらず。

大学卒業が迫った1951年。長崎のミッション系の活水（かつすい）女子高校に英語の教員として就職が決まった。活水学院は、長崎のオランダ坂に隣接し、明治期に開学した女子教育の名門である。

ちょうど、その頃、昂は新聞で「フルブライト奨学金」の記事を目にす

ることになる。フルブライト奨学金は、アメリカ政府が戦後の日米関係の再構築のために始めた。

アメリカの政治家、フルブライトが発案した制度で、今でもアメリカの大学院で学ぶ日本人に奨学金を提供している。ジェームズ・フルブライト (James William Fulbright, 1905年4月9日 - 1995年2月9日)。フルブライトは、民主党の外交族の大物上院議員で、上院外交委員長などを歴任した。

アメリカの社会、文化への関心、憧れを強めていた山本昂は、アメリカに留学したい、という衝動を抑えきれなくなった。活水女子高校への奉職は決まっていたが、「どうせ、無理だろう」という気持ちから、気軽に出願した。当時、民間の留学はほとんど無理な時代だったため、この「フルブライト奨学金」には応募が殺到した。

筆記と面接。結果は以外にも合格だった。山本昂は後に「海軍兵学校の授業で教えられた英語の基本、そして進駐軍のアルバイトで身につけた英会話力が評価された、と思う」と語っている。

活水学院には、お詫びに行った。すると「予定通り、活水女子中学・高校に就職していただき、休職ということにして、帰ってきたら学院に貢献してください」という話になった。活水学院による派遣休職、という形で1952年9月、山本昂はフルブライト奨学金1期生としてアメリカに出発する。当時としては珍しい空路での往復、という厚遇だった。

留学先は、テキサス州にあるベイラー大学。フルブライト1期生として、希望すればハーバード、エール、スタンフォードなどのビッグネームに行くこともできたはずだ。私、山本清なら、帰国後の様々なことも考慮してハーバードあたりを選ぶだろう。しかし、山本昂（やまもと・のぼる）は、修士論文のテーマである19世紀、ヴィクトリア朝の詩人、ロバート・ブラウニング研究で業績を積んでいる教授がいて、ブラウニング図書館を有するベイラー大学に行くことを決めた。

テキサスでの2年間。昂は、大学の寮の仲間、教会の仲間に囲まれ、楽しく2年間を過ごした。夏休みには子どもキャンプのボランティアをした。クリスマス休暇には、九州大学時代に毎月、10ドルの支援をしてくれたケンタッキーのリードさんの家族を訪れたりした。

修士課程を終えて、1954年5月に帰国。活水女子中学・高校で、アイゼンハワーと約束した「For Japanese Girl Students」の第一歩を踏み出した。留学前の約束通り、大学卒業時にポストを提供してくれた活水女子中学・高校に身を置いた。国立大学、東京の名門私立大など、様々なオファーがある中で2年間の「お礼奉公」。律儀な昂らしい行動、といえるだろう。

1956年4月、名古屋のミッション系の女子大、金城学院大学で研究生生活をスタートさせた。金城学院では29年間、助手・講師・助教授・教授・法人理事として、女子教育に献身した。

1985年、活水女子大学から学長のオファーが来た。30年間、離れていた活水学院。受験生の都会志向、共学志向で、金城学院、活水学院ともに同じ悩みを抱えていた。30年前の山本昂の「お礼奉公」を覚えており、金城学院の経験を参考にしたい、と考えた活水学院関係者が、昂を招くことにした。

60年安保の時は、金城学院大学助教授。70年安保の時は教授。当時、女子大でも大学闘争の嵐が吹き荒れ、山本昂は教授会メンバーとして、大学は学問・教育の場でなければならない、という立場で学生たちと向き合った。

金城学院大学時代は、研究・教育に力を注いだ。研究面については、私は文学はまったく門外漢で分らないが、心理学分析を文学に融合させる「サイコアナリティカル英文学」という手法で文学を研究する学会「サイコアナリティカル英文学会」の会長を1996年から6年間、務めた。

活水学院では、学生寮を建設したり、音楽学部の新設に力を注いだ。

聖学院では、聖学院大学副学長の時、チャペルの新築を手がけた。ある

時「彩の国さいたま芸術劇場」に観劇に行った。そして、その建物の設計に感激した。いきなり日本を代表する建築家、香山壽夫・東大名誉教授に連絡を取って、さいたま芸術劇場の建物を見た感想を伝えた。聖学院大学チャペルの設計を依頼すると、香山教授は快諾した。

香山壽夫教授は、このチャペルを受賞対象作品として第62回日本芸術院賞を受賞。2004年10月に完成した聖学院大学チャペルは、香山建築の代表的な作品となった。

2006年に妻が他界した後、山本昂は印西市に墓を建てた。この時、香山教授に「先生の研究所の若い建築家に、私たちの墓の設計をお願いすることはできませんか」と打診した。香山教授は「私にやらせてください」と応じた。父も私も非常に驚いた。山本昂は、印西牧の原駅から南に1キロちょっとの「千葉ニュータウン霊園」にある香山壽夫設計の墓に入ることになる。香山壽夫設計による墓は、ご本人の生前墓に続き、2基目だった。聖学院大学チャペルのデザインが一部、取り入れられており、父が訳したイギリスの詩人、ブラウニングの一節が刻み込まれた本の形をした石版。そして教室をイメージした石の椅子がある、山本昂お気に入りの、世界で1つだけの墓が完成した。



# Ulyssesに見る現代の危機と救い

## —反転したOedipus Complexを通して—

松 山 博 樹

はじめに

本論の狙いは、精神分析学の最も基本的な概念である Oedipus Complex を援用して Ireland の作家 James Joyce (1882-1941) の長編小説 *Ulysses* (1922) における主人公 3 人の関係性を分析することによって、逆に Oedipus Complex の概念に光を照射し、文学作品の精神分析的考察に新たな視点を設ける点にある。それは、子どもからの視点に偏りがちなその概念に対して、親からの視点を当てるというものである。Joyce の *Ulysses* は、後に分析するような理由から、Oedipus Complex の裏返しともいえるこのような親からの視点の分析に適している。そしてその考察を通して、*Ulysses* が我々読者、現代人に問うている人間心理の普遍的な問題にも新たな光を当ててみたい。

### 1. 3 人の現代人

*Ulysses* は Modernism 小説の例にもれず、様々な技巧が数多く凝らされている。例えばその筋の多くはいわゆる Stream of Consciousness の手法によって描かれ、3 人の主要人物の意識を通して物語が展開されてゆく。

一人目の主人公は、*Ulysses* の前編として位置づけられる *A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916) (以後、*Portrait* と表記) において、心優しく繊細な内面性ゆえに幼い頃から周囲になじめず、青春時代に至ってもなお親子関係などの問題に悩み、ついには Ireland を去ることとなった Stephen Dedalus である。文学を志した Stephen はその後の挫折を経て *Ulysses* においてはすでに帰国しており、死にゆく母に対する振る舞いを後悔しながら

教員生活を送っている。生徒を前にしていてもその生徒の母子の絆に空想が及んでしまうほど、母という存在は彼にとっていまだに特別なものであり続けている。

Pain, that was not yet the pain of love, fretted his heart. Silently, in a dream she had come to him after her death, her wasted body within its loose brown graveclothes giving off an odour of wax and rosewood, her breath, that had bent upon him, mute, reproachful, a faint odour of wetted ashes.<sup>1</sup> (p.4)

*Amor matris*: subjective and objective genitive. With her weak blood and wheysour milk she had fed him and hid from sight of others his swaddling bands. (p.34)

一方で、だらしのない生活を送る父との関係にも Stephen は今でもやはり相変わらず悩んでいる。

---A father, Stephen said, battling against hopelessness, is a necessary evil.  
(pp.265-6)

Paternity may be a legal fiction. Who is the father of any son that any son should love him or he any son? (p.266)

The son unborn mars beauty: born, he brings pain, divides affection, increases care. He is a new male: his growth is his father's decline, his youth his father's envy, his friend his father's enemy. (pp.266-7)

Stephen と父母とのこういった関係にはまさしく Oedipus Complex の典

型を見ることができただろう。

二人目の主人公 Leopold Bloom は新たに *Ulysses* で登場する人物である。彼もやはり家族関係、人間関係に悩んでいる。かつて父は自殺し、息子も生後数日で病死、娘は親元を離れ、妻は不倫を楽しんでおり、自分自身はユダヤ人として周囲から差別されている。そして三人目の主人公 Molly は Leopold の妻であり、女性的な魅力にあふれ、肉感的で、浮気も厭わない。

*Ulysses* は主にこの3人の意識の流れを通して物語が紡がれてゆくことになるが、実は Dedalus、Bloom 両家は特にゆかりがあるわけではない。1904年6月16日、人生に迷うかのように Dublin の街をさまよい歩いていた Stephen Dedalus と Leopold Bloom が作品の後半に至ってはじめてようやく出会い、しかしそれでいて濃密とも言い切れない程度の交流をするというだけの物語であり、波乱万丈の展開があるわけでもない。現代にありがちなこのような希薄な人間関係は、Joyce がこの作品の下敷きにしたとされる Homer の *Odyssey* との比較によってさらに強調されるだろう。Homer 版は英雄 Odysseus が Troia 戦争の勝利を経て、次々と降りかかる難関を乗り越えながら凱旋帰国する漂流物語であり、貞淑な妃はその帰りを待ち続け、勇敢な息子は父の行方を探し求める。一方で、1904年の Dublin をさ迷い歩くみすばらしい Leopold の留守を預かる妻は浮気にいそしんでおり、息子はあの世に先立っている。現代の小市民の卑小な生活と古代の英雄神話との極端な落差は作品全体に漂っている停滞感をなお一層際立たせることになる。偉大な英雄などはもはや期待できない閉塞感漂う日常を淡々と生きている小市民の姿をつきつけられた読者はわが身を振り返り、身につまされることだろう。そしてこういった人物関係は Joyce 自身の家庭をモデルにしており、それ故に彼にとってもそれは切実な問題であった。もちろんこういった問題は Oedipus Complex の問題と表裏一体となっており、例えば Sheldon Brivic は精神分析の立場から *Portrait, Ulysses* についていくつかの論文を書き、両作品が Oedipus Complex を軸にして見事に

構造化されうるとし、まさしく“Maternal goal”, “Paternal threat”, “Nursing image”といった言葉を用いてそれを説明している。<sup>2</sup>

## 2. 息子から父へ

*Portrait* は主人公のまだ言葉もままならない幼児期から異国へとひとり旅立つ青年期までを描いている。そこでは母への愛、父に対する拒絶感というまさに Oedipus Complex の問題そのものが示されており、Brivic もそういった視点から *Portrait* を論じている。そしてその問題は先に見たように Stephen の成人後を描く *Ulysses* においてもいまだに強く尾を引き続けていた。こういった Stephen の姿は次のように言い換えることもできるだろう。すなわち、まだ幼かった頃の *Portrait* においてはもちろんのこと、成人したはずの *Ulysses* に至ってもなお Stephen はあくまでも息子として描かれているのである。彼は *Portrait*、*Ulysses* 両作品において父や母に対する子どもの立場としてどこまでも扱われている。Oedipus Complex の概念について初めて言及された論文において、Sigmund Freud もまた以下のように書いている。

男の子は、新たに得られた意味においても母親を欲し始め、父親をこの欲望に立ちふさがる恋敵としてあらためて憎悪し始める。われわれの言い方をすれば、男の子はオイディプス・コンプレックスの支配下に入るのだ。<sup>3</sup>

Freud は Oedipus Complex の問題をまずは子どもの発達理論として論じ、それ以降の年代の問題についてはあくまでも乳幼児期の問題の事後の表れとして遡及的に扱う。つまり Freud にとっても人間とは、Stephen がそうであったように、どのような年齢であってもあくまでも育てられている側、あるいはかつて育てられた側として扱われるべきであり、父母に対する子

どもとして分析されなければならない。Brivic のように Freud の Oedipus Complex の概念を援用して Stephen の心理を分析することが有効であることはこのことから明らかだ。Stephen は「男の子」なのである。しかし、Bloom 家についてはどうだろうか。

この作品を覆う停滞感は Dedalus 家の抱える問題としてすでに *Portrait* においても描かれていたが、とりわけ *Ulysses* ではそういった家庭問題がさらに二重、三重に重層化している。それは、Dedalus 家に加え、新たに Bloom 家が登場し、しかも Leopold を軸に 3 世代の Bloom 家の姿が描かれることになるからであり、またそれに加えてかつて生後数日で病死した息子 Rudy の姿を Leopold が Stephen に重ね合わせて見ているからである。

BLOOM: (*Wonderstruck, calls inaudibly*) Rudy!

RUDY: (*Gazes, unseeing, into Bloom's eyes and goes on reading, kissing, smiling. He has a delicate mauve face. On his suit he has diamond and ruby buttons. In his free left hand he holds a slim ivory cane with a violet bowknot. A white lambkin peeps out of his waistcoat pocket.*) (p.703)

街中での喧嘩に倒れた Stephen の若々しさを優しいまなざしで見つめ、介抱しようとした Leopold がそこに息子の幻影を見て、思わず声をかけている。失った息子 Rudy へのいまだに忘れられない思い、そして実の息子に対するかのような Stephen への愛情が感じられるだろう。このように *Ulysses* においては疑似的な親子関係までが描かれ、家族関係はさらに重層性を帯びてゆく。そしてそのことによってさらに新たな視点がそこに加わることにもなる。それは Bloom 家の息子であると同時に父でもあるという Leopold の持つ二重の視点である。*Portrait* の後日談である *Ulysses* の第一部もやはり Stephen の視点から描かれ、彼は Dublin の街を歩き始め

るのだが、続く第二部は同じ時と場所が Leopold の視点から描かれることによって、Portrait から Ulysses へ、Stephen から Leopold へ、息子から父へという読者の視点の移動が行われてゆく。そして Brivic の言うようにはっきりと Oedipus Complex の問題が表れているこの Ulysses という作品は、全 18 挿話中 12 挿話を占める第二部が主に Leopold の視点から描かれてゆくということからも、父の視点からその問題を論ずることの重要性がうかがわれるだろう。このことによって読者は両作品を通して、幼児期から青年期、成人後から中年期までの視点を経験することになり、特に Ulysses においてはいくつもの家族像を通して息子の視点と父の視点が重なり、あるいは交差しつつ、その重心が少しずつ父の視点に移ってゆき、また、それが強調されてゆくことになるのである。

### 3. 生涯発達、世代継承

このような Ulysses の特徴を踏まえれば、Freud の理論を継承し、Identity や Moratorium といった精神分析学上の基本概念を確立した E. H. Erikson の理論を援用することが適切であると思われる。Erikson は生涯にわたっての心の成長、世代の継承という新たな視点をそこに見出しているからである。

フロイトは、成人の精神分析治療で回想された幼児体験や乳幼児、すなわち臨床乳幼児を対象として発達論を体系化した。リビドーの体制化による人格発達論である。その発達段階は、口唇期・肛門期・男根期（エディプス期）・潜伏期・性器期と図式化される。エリクソン（E. H. Erikson）は、フロイトの人格発達論を、生涯にわたる精神発達、つまりライフサイクル 8 段階説として発展させた。乳幼児期から「自律」「自発性」「勤勉」「同一性」「親密性」「生殖性」「自我の統合」の発達課題と、その対極の危機が想定されている。<sup>4</sup>

Erikson によれば、心の発達の各段階には特有の課題があり、しかもそこには正と負の側面がある。しかし人間は負の側面をどうにか回避しつつ、正の側面を得て次の段階に上がってゆくという単純な成長過程を生きるわけではない。むしろそういった正と負の側面を共に経験し、そのバランスに苦闘し尽くすことでそれらを弁証法的に統合、昇華し、あるいは潜在的にその後もその課題を抱えつつ、新たな段階を生きてゆくことになる。そしてある瞬間に何らかの問題が発生すると過去の段階に残した課題があらためて表面化する。Erikson はこういった観点から Oedipus Complex の問題に育てる側の視点をもたらし、しかもそれを重要視する。その段階は「生殖性」、「自我の統合」という言葉で示され、新たな世代への継承に伴ってそれまでの生き方を振り返り、人生の仕上げの段階へと歩んでゆく重要な段階として位置づけられる。しかし、そこでもやはり家庭の一員としての役割を十分に果たせない時に人生に対し切実で深刻な疑問が負の側面として生じてくることになる。

Leopold も家庭における父としての挫折を経験している。十代の娘は早くから独立し、親元を離れ、父の心配をよそに奔放な生活を送っている。このような娘の姿は浮気を楽しむ妻と重なり、父として不安を覚えてしまうのも無理はない。また、娘の後に生まれた息子は生後すぐに世を去るが、それは生まれながらに負っていた重い障害によるものであることがほのめかされる。大きな困難を背負って生まれた息子の早過ぎる死は Leopold にとってきわめて衝撃的な経験であり、今でも彼はことあるごとにその時の思いを反芻する。

I too. Last of my race. Milly young student. Well, my fault perhaps. No son.  
Rudy. Too late now. Or if not? If not? If still? (p.367)

娘 Milly の奔放さと息子 Rudy の死に思いを至らせ、もう取り戻すこと

のできない子育ての時期を懐かしみ、悔やんでいる。父親に自殺された Leopold は自らも子どもとして世代の継承を受けることがままならなかったかもしれない、またさらには父として新たな世代への命の継承にもショッキングな形で失敗し、家族という形態における自らの無力さにさいなまれているのだろう。

I was happier then. Or was that I? Or am I now I? Twentyeight I was. She twentythree. When we left Lombard street west something changed. Could never like it again after Rudy. Can't bring back time. Like holding water in your hand. (p.213)

息子の件が引き金になってのことか、その後は「生殖性」そのものも不能となり、今や妻 Molly との関係は満たされぬものとなってしまったことに落胆している。また、それが子育てのパートナーであったはずの妻の浮気の原因ともなっており、もはや Bloom 家は家族の体をなしてはいない。このように Leopold の抱える問題は Freud の視点よりも、Erikson の視点からとらえるべきであることが分かるだろう。

Leopold が家庭内における父という立場から Oedipus Complex の問題を引きずっていることは、擬似的な息子 Stephen への対応からも見えてくる。彼は Stephen を単に息子のように愛おしく思うだけではない。裏切られてもなお Molly を愛するあまりに Leopold は、若い Stephen に肉感的な妻の写真を見せ、ある目的を持ってその反応を見ながら、彼を妻の語学教師として自宅に招く約束を取り付けようとする。そしてやはり Molly も Stephen に亡き息子の姿を重ね合わせ、感傷的というよりはむしろ感情的になる。

[ . . . ] he says hes an author and going to be a university professor of

Italian and Im to take lessons what is he driving at now showing him my photo its not good of me I ought to have got it taken in drapery that never looks out of fashion still I look young in it I wonder he didnt make him a present of it altogether and me too [ . . . ] (p.921)

妻は擬似的息子に対して母性を示す。しかし同時に夫の企みにも気づき、その期待に応えるように Stephen に対して性的感情をも抱いている。絆が失われつつある夫婦が無意識のうちに一致協力し、行動し、実現しようとしているこのような奇妙な疑似的親子関係は Oedipus Complex の構図と重なってはいないだろうか。Oedipus 王の悲劇、すなわち、息子が父を排除し、母を妻とした物語を、不思議なことに父と母の立場から実現させようとしているのである。擬似的息子を得ることで、自分たちの残してきた課題に無意識のうちにあらためて取り組もうとしているのかもしれない。Leopold と Molly が Stephen を巻き込んででも実現しようとしているこのような風変わりな関係性は Oedipus Complex の反転した形である。しかし、先に見たように Stephen は父性なるものを受け入れはしない。擬似的息子に擬似的父親は手を焼くことだろうが、Erikson にとってはそういった困難でさえ、最終的には正の側面と弁証法的に統合されることを前提として経験される歓迎すべき負の側面である。Freud は人間の精神をあくまでも病理という視点から分析したが、Erikson はそのような人間の心の弱さを認めつつも、困難を経ての心の成長という視点をそこに導入した。そしてその結果、最終的に到達すべき人間の究極的、理想的な段階にまで考察の枠を広げ、それを「超越」という言葉で表した。

メタ的な見方への移行、つまり、物質的・合理的な視点から、より神秘的（コスミック）・超越的な視点への移行。通常は、この移行とともに、人生の満足感の増加がもたらされる。<sup>5</sup>

自己の感覚は広がり、自分と関わりのある他者をも広く含むものとなる。(p.182)

Leopold は「生殖性」という課題にあらためて取り組み始めた一方で、それまでの人生を総合的に肯定的に振り返ることで円熟の境地が達成される「自我の統合」に苦闘している。しかし同時にその困難を糧として、「宇宙」、「輪廻」、「神」、「平和」、「愛」などといった超越的感覚への関心を作品の中で繰り返し垣間見せる彼の心は「超越」の準備にも入ろうとしているのかもしれない。

Leopold が中心に描かれてきた第二部の最後、クライマックスとして彼の幻想が繰り広げられる。<sup>6</sup> 裁判の結果、Leopold は絞首刑の判決を受けるが、瀬戸際で国王 Leopold 1 世として見事に復帰する。しかし、教会から攻撃を受け、性病検査を受けさせられる羽目になる。結果、女性として妊娠していることが判明した Leopold は黄色人種と白人種の子どもを産む。そして、性別や人種を超越した救世主として奇跡を行うも、かつての悪事を追及されて再び処刑の憂き目にあうが、炎の中で見事に復活を遂げる。Leopold の幻想は幻想だけに奇怪だが、人生における困難と克服、世代の継承がそこで意識されていることは明らかであり、最後に彼は幻想の中で人間の究極的な姿として救世主となる。これらの過程は人生の最終的な課題として Carl Gustav Jung が論じる「統合」、「超越」の概念とも重なることだろう。<sup>7</sup> そしてまた Joyce 自身も評論などにおいて、当時の Ireland が置かれていた状況などを踏まえ、このような全宇宙的なレベルの「超越」について様々な言葉で繰り返し論じ、社会に訴えていた。<sup>8</sup> 彼はこの作品が出版された当時、Leopold とほぼ同じ年齢にあたっており、妻 Nora の浮気を疑い、娘 Lucia の心の病などに悩んでいたことも無視できない事実だろう。娘 Lucia の治療にあたったのは Gustav Jung であったこと、そして Richard Ellman の作成した Joyce の蔵書目録には Freud が母子関係

を論じた Leonardo da Vinci 論、Jung が父子関係を論じた *The Father in the Destiny of the Individual* が入っていることも無視できない事実である。<sup>9</sup> 自らも家庭に困難を抱え、実際に「生殖性」や「自我の統合」に苦闘しつつも、社会に「超越」を訴えていた Joyce の切実な思い、願いが、哀れみ誘う Leopold の挫折と全てを包み込むような優しさ、そして困難を経ての心の成長を通して描かれているのかもしれない。

*Ulysses* の平凡な一日が終わろうとする第三部、街で乱闘騒ぎを起こした Stephen に Leopold は父親のように優しく寄り添い、その安全を確保するために Bloom 家に連れて帰る。泊まるようにと声をかける Leopold の優しさを Stephen が拒絶することからも、やはりこの擬似的親子関係はすぐには成就しないのかもしれない。確かに二人の会話はかみ合わない。しかし、Stephen と Leopold が二人で鏡をのぞきこむと、そこには Shakespeare の姿が映っている。文学を志す若き Shakespeare と妻に悩む中年の Shakespeare が一人の Shakespeare として映っている。それは自然に向かって掲げられた鏡を通して Stephen と Leopold が一体化した姿なのだろう。<sup>10</sup>

Stephen and Bloom gaze in the mirror. The face of William Shakespeare, beardless, appears there, rigid in facial paralysis, crowned by the reflection of the reindeer antlered hatrack in the hall. (p.671)

こういった鏡のエピソードには、Freud の Narcissism 論や Jacques Lacan の鏡像段階論、René Girard の模倣的欲望論を見出すことが出来るかもしれない。これらの精神分析上の概念に共通するのは Oedipus Complex に伴う反発と共感というアンビバレントな対人感情である。多くを語り合うわけでもなく星空を見上げながらコーヒーをすする二人の姿には、閉塞感が漂う殺伐としたそれまでの場面に比べ、不思議なほどに穏やかさ、安らか

さが感じられることもやはり事実であり、そこには日中の Dublin の喧騒や猥雑さと対照的な静寂に満ちた夜の場面であるからこそなお一層、言葉を越えた、無意識の領域に属しているとも言える、もはや血の繋がった親子関係などというものさえ越えた宇宙的な広がりを持つ絆すら感じられることだろう。「超越」に向かいつつあるかのような厳かな宇宙的な雰囲気にもむしろ読者は厳しく卑小な現実を生きる自分自身の疎外感の救いの可能性をも感じ取るかもしれない。Leopold の心優しい言動はもちろんのこと、精神分析の立場からこの作品を論じた Colin McCabe や Brivic が共通して語るところによれば彼の存在そのものが人種、性別などあらゆる区別を無意味なものにしている。<sup>11</sup> 彼は女性的な優しさを兼ね備えた男性であり、英国から虐げられていた Ireland において、さらにその中でもマイノリティのユダヤ人であり、しかもユダヤ人のコミュニティにおいてさえユダヤ教を捨てたカソリック教徒として扱われ、あらゆる場の異端者として Dublin を一日中さ迷い歩く。そして困難を経た Leopold の「統合」、「超越」は、最終的に人間の地上原理を越えた救世主としてのレベルまでを目指すのである。

#### 4. 父と息子を結びつける母

一方で Molly はこのような二人を尻目にすでにベッドで夢うつつにあり、そのとりとめない意識の流れの中、Ulysses は終幕を迎える。Stream of Consciousness の典型として最も有名な場面である。句読点もほとんどないままに流転するまどろみの中、Leopold の優しさにこそ人間の価値があると Molly が気づき、夜の帳が下りる穏やかな雰囲気の中、夫婦関係の修復が予感されて作品は幕を閉じる。このような混沌とした意識の流れにもやはり全てを包み込む「超越」を読者は感じざるを得ないだろう。肉感的で女性らしさに溢れる Molly の姿には、Jung が人間の無意識に眠る元型のひとつとした Great Mother の姿も見ることができるとも思われる。それ

はすべてを「統合」し、「超越」し、包み込む。古代の英雄が数々の苦難を乗り越えて最後に母国に凱旋したように、様々な苦悩を抱えながら現代の Dublin の平凡な一日を過ごし終えた男たちが **Great Mother** の元に帰還して *Ulysses* は終わりを迎える。Leopold のみならず、擬似的息子 Stephen も、Molly のもとへ通う浮気相手も、そして現代を生きる読者も、意識が抑制される夜の夢うつつの場面で自分の無意識に眠る人類の超越的な元型を Molly と共に経験し、安らぎを覚えることだろう。

おわりに

まさしくここに至り我々は、この作品が題名に冠していた古代の英雄神話の記憶を通して、全人类的な無意識に眠る元型を **Great Mother** に感じ取り、困難を抱えた自分自身の日々の生活、人生の向こう側にある広大無辺な全宇宙的「統合」、「超越」を見出すことができる。そしてそれは Joyce 自身もまたそうであったのかもしれない。*Ulysses* における Oedipus Complex の問題に対して生涯発達と世代継承という視点から当てる光が示してくれたのは、決して英雄ではないにしても人間ならば誰もが困難を抱えつつもむしろそれと日々苦闘するからこそ生涯をかけて心を成長させることができるのだということを体現しているような主人公の等身大の姿であった。その成長の先には、疎外感で満ちた現代においてさえも我々は目に見えない大きな摂理に包まれて生きているのだという究極的な安心感も示されている。そしてそれは文学作品と我々読者の具体的な日々の心の問題をつなげる橋渡しともなりうる精神分析的考察の意義をも提示してくれているようにも思えるのである。

## Notes

- 1 James Joyce, *Ulysses* (New York: Garland Publishing, 1984), p.4. 以下、同書からの引用は全てページ数を括弧に入れて本文中に記す。
- 2 Sheldon Brivic, “The Disjunctive Structure of Joyce’s Portrait.” *A Portrait of the Artist as a Young Man*. Ed. R. Brandon Kershner (Boston: Bedford/St. Martin’s, 2006), p.291. Brivic. “Consciousness as Conflict: A psychoanalytic Approach to Ulysses.” *Approaches to Teaching Joyce’s Ulysses*. Ed. Kathleen McCormick and Erwin R. Steinberg (New York: The Modern Language Association of America, 1993), pp.59-66.
- 3 フロイト『フロイト全集 1 1』訳 高田珠樹・甲田純生・新宮一成・渡辺哲夫 (岩波書店、2009), p.252.
- 4 日本心理臨床学会編『心理臨床学事典』(丸善出版、2009), p.34.
- 5 エリクソン, E. H. / J. M. エリクソン『ライフサイクル、その完結』訳 村瀬孝雄・近藤邦夫訳 (みすず書房、2005), p.181. 以下、同書からの引用は全てページ数を括弧に入れて本文中に記す。
- 6 この幻想の中でも特に Leopold が救世主となる場面は出版直前に急遽書き加えられた。たとえそれが荒唐無稽な幻想であってもこの場が重要な意味を担っていることがうかがわれるだろう。Joyce 自身も書簡の中でそれを “the messianic scene” と呼び、繰り返し言及している。Joyce. *Letters of James Joyce Vol. III*. Ed. Richard Ellmann (London: Faber and Faber, 1966), pp.51-3.
- 7 Jung は *Ulysses* については否定的ではあったが、心理学の観点から「『ユリシーズ』は現代の「人間記録」である」と評した。*Ulysses* は現代人の心の記録として読まなければならない。ユング.『ユング著作集 3 こころの構造』訳 江野専次郎 (日本教文社、1986), pp.139-40.
- 8 *Subjugation* (1898) における非暴力主義、平和主義への傾倒、*Today and Tomorrow in Ireland* (1903) などにおける Ireland の平和的独立への関心に明らかである。Joyce. *Occasional, Critical, and Political Writing*, Ed. Kevin Barry (Oxford University Press, 2000)
- 9 Ellmann, Richard. *The Consciousness of Joyce* (Toronto and New York: Oxford University Press, 1977)
- 10 髭のない Shakespeare は妊娠する Leopold の超越性を、こわばった顔は二人の抱える心理的困難を表しているのかもしれない。

- 11 MacCabe, Colin. *James Joyce and the Revolution of the Word* (London: Macmillan Press, 1979), p.174.



## *A Masque presented at Ludlow Castle, 1634* における the Lady と Sabrina の精神的な結びつき

桶 田 由 衣

はじめに

17世紀英国詩人 John Milton (1608-74) は、Bridgewater 伯 John Egerton の Wales 総督就任を祝うために、Henry Lawes から執筆依頼を受け、通称 Comus として知られる仮面劇 *A Masque presented at Ludlow Castle, 1634*<sup>1</sup> を創作した。*A Masque* は、1634年9月29日の Michaelmas に Shropshire の Ludlow 城において上演された。主人公 the Lady は、弟達と共に父親の元に向かう途中、肉欲に耽る魔神 Comus の住む森の中で弟達とはぐれる。森で迷う the Lady に Comus が甘言を用いて自分の魔殿へと誘い込む。一方、姉を探す弟達の元に、the Attendant Spirit が羊飼いの Thyrsis として登場し、the Lady の危機的状況を伝え、Comus 撃退のための薬草 “haemony” を弟達に渡す。弟達は the Lady を取り返すことに成功するものの、Comus を逃がしたために、the Attendant Spirit に忠告された方法で the Lady に絡みつく Comus の魔法を解く手立てを失う。そこで再び現れた the Attendant Spirit がセヴァン川の仙女 Sabrina を呼び出し、the Lady は Sabrina によって救済される。最終的に the Attendant Spirit の導きによって、三人の子女は両親のもとに無事に辿り着く。

松浦暢は、C. G. Jung (1875-1961) が水の精について、悪のイメージを付与される傾向があるものの、水の精には両義性があると指摘していることに注目し、あらゆる文学作品に登場する善あるいは悪のイメージが付与された水の精について論じている。<sup>2</sup>そして松浦は、数ある水の精の中で、Sabrina が女性の救世主という善のイメージを備えていると指摘して

いる。<sup>3</sup>松浦が述べているように、the Lady は Sabrina によって救済されるのだが、それは the Lady が、作品を通して Sabrina に対し、いかなる時も絶えず助力を求めているからこそ、救済されたのである。the Lady は危機的状態に陥った際、自分の肉親に助けを乞うことはせず、むしろ“chastity”の持つ力を信じ続ける。その結果、“chastity”を象徴する Sabrina<sup>4</sup>によって、Comus の魔法から解放される。このことから、the Lady が、血の繋がり以上に、一貫して Sabrina という血の繋がりのない存在から、助力を得ようとするのがわかる。そこで本稿では Sabrina が the Lady を含む女性にとっての救世主としての面だけでなく、Sabrina と the Lady が精神的な繋がり、即ち血の繋がりのない象徴的な親子であることについて論証したい。そして Sabrina と the Lady の関係性を論証するために、Comus と the Lady それぞれの親子関係を、Jung の *The Archetypes and the Collective Unconscious* (1971)<sup>5</sup> における母元型を用いて、比較考察する。さらに、the Lady が水の精から助力を得ることから、Jung の同書で論じられている水と無意識に関する考えを *A Masque* に当てはめて考えてみたい。肉親との繋がりを求める Comus と精神的な繋がりを求める the Lady、それぞれの親子関係を比較することで、精神的な繋がりを持つ者へ一貫して信仰を抱き続けた結果、the Lady が救いを得るということを解明する。

### 1. *A Masque* における親子関係と Jung の理論

以下は、*A Masque* における親子関係を表している。

子	精神的な繋がりのある親		血の繋がりのある親	
Comus [息子]	Cotytyto [母]	※ Hecate [母]	Circe [母]	(Bacchus [父])
the Lady [娘]	Sabrina [母]		(Noble Lord [父])	(Lady Bright [母])

太字で表している登場人物は、それぞれの子どもの繋がりのある親ないしは親代わりとなっている。一方、括弧で括られている登場人物は、作

品中であまり言及されない親である。このことからわかることは、Comus と the Lady の共通点として、共に血が繋がっている、繋がっていないに関わらず母親との繋がりが強いということである。Jung は母元型の持つ多くの側面について、その典型的な形態をいくつか挙げて説明している。その一例が以下の引用である。

First in importance are the personal mother and grandmother, stepmother and mother-in-law; then any woman with whom a relationship exists... Then there are what might be termed mothers in a figurative sense. To this category belongs the goddess, and especially the Mother of God, the Virgin, .... Many things arousing devotion or feelings of awe, as for instance ... the woods, the sea, or any still waters, ... can be mother-symbols. The archetype is often associated with things and places standing for fertility and fruitfulness: the cornucopia, ..., a garden. It can be attached to ... a spring, ... or to various vessels such as the baptismal font,....

*(The Archetypes and the Collective Unconscious 81)* <sup>6</sup>

以上の引用で挙げたシンボルと母元型の特性について、さらに Jung は次のように論を進めている。

All these symbols can have a positive, favourable meaning or a negative, evil meaning. An ambivalent aspect is seen in the goddesses of fate (Moirai, Graeae, Norns) . Evil symbols are the witch, ... deep water, ... This list is not, of course, complete; it presents only the most important features of the mother archetype.

The qualities associated with it are maternal solicitude and

sympathy; ... any helpful instinct or impulse; all that is benign, all that cherishes and sustains, .... The place of magic transformation and rebirth, together with the underworld and its inhabitants, are presided over by the mother. On the negative side the mother archetype may connote anything secret, hidden, dark; the abyss, ..., seduces, ... that is terrifying and inescapable like fate. (*The Archetypes and the Collective Unconscious* 81-2) <sup>7</sup>

先に挙げたいくつかのシンボルが、上記の引用にみられるような母元型を持つと Jung は論じている。また Jung は、このような母元型が母親コンプレックスの基礎を成しているとも説明している。(*The Archetypes and the Collective Unconscious* 85) <sup>8</sup> これらの特性を考慮しつつ、*A Masque* において「母親」ないしは「それに代わる母親」がどのような特性で描かれているか検証する。

## 2. Comus とその親子関係

はじめに、Comus とその親子関係について見ていく。Comus は冒頭の表にある通り、酒の神 Bacchus と魔女 Circe の間に生まれた子である。Circe は太陽神の子で、その持っている魔力によって、人間は直立した姿を失い、豚の姿に変えられる。(A *Masque* 46-53) この点から Circe は、先の母元型の内、否定的な面を備えていると考えられる。そしてこの引用文の直後に、Comus に関する説明がなされる。

This nymph[Circe] that gazed upon his clustering locks,  
 With ivy berries wreathed, and his blithe youth,  
 Had by him, ere he parted thence, a son  
Much like his father, but his mother more.

Whom therefore she brought up and Comus named,  
 Who ripe, and frolic of his full-grown age, ...  
Excels his mother at her mighty art,  
 Offering to every weary traveller,  
His orient liquor in a crystal glass,  
To quench the drought of Phoebus, which as they taste ...  
Soon as the potion works, their human countenance,  
The express resemblance of the gods, is changed  
Into some brutish form of wolf, or bear,  
Or ounce, or tiger, hog, or bearded goat,...  
 (A Masque 54-71 括弧・下線論者、以下同様)

Comus が父親の Bacchus よりも母親 Circe に似ており、母親譲りの魔力を備え、かつその力は母親を凌ぐほどであることがわかる。Comus も人間を淫楽に陥らせる力を持つ、極めて肉欲的な魔神であることが、上記の引用文からも明らかである。Comus は登場すると、先の表の Cotytto という神的存在に呼びかけ、力添えするよう呼びかける。次の引用は、Comus が Cotytto に呼びかけをしている場面である。

Hail goddess of nocturnal sport  
 Dark-veiled Cotytto, ...  
 Stay thy cloudy edon chair,  
 Wherein thou rid'st with Hecat', and befriend  
 Us thy vowed priests, till utmost end  
 Of all thy dues be done, and none left out,  
 Ere the blabbing eastern scout, ... (A Masque 128-38)

Comus は主として Cotytto に呼びかけているが、この呼びかけでは Cotytto と共に Hecate という神的存在がいることも示唆されている。John Carey は、*A Masque* の注において Cotytto が Thrace の神的存在で、Cotytto に対する淫らな儀式は夜になって秘密裏に開かれると説明し、一方 Hecate が、魔女たちによって呼び出される、魔術を司る神的存在だと述べている。<sup>9</sup> 先の Jung の引用から考えると、Cotytto と Hecate は、Circe と同様に誘惑者、魔女という否定的なイメージで描かれていることがわかる。しかしながら、Comus の視点から見れば、自分を支えてくれる神的存在であり、血は繋がらないものの、母親代わりの存在であると言える。

Comus は、上記の引用文の後にこの神的存在に対する祈りの儀式を開くことになる。しかしながら、William A. Oram が指摘するように、Comus の怪しげな儀式は中断することになる。<sup>10</sup> というのもそれは、Comus が the Lady が近くにいることに気づいたからである。そのために Cotytto と Hecate への儀式は、不完全のままとなる。儀式がすべて終わるまで、力添えするようにと Comus が祈っていたにもかかわらず、中断したことで Comus は神的存在たちの助力を完全には得られないことが読み取れる。そして、興味深いことに、Comus は the Lady の存在に気づいてから、血の繋がった母親 Circe の存在を意識し始める。

Now to my charms,  
And to my wily trains, I shall ere long  
Be well stocked with as fair a herd as grazed  
About my mother Circe. (*A Masque* 150-3)

この台詞で、Comus は初めて自分の母親 Circe について言及することになる。この引用文において、Comus は、今はまだ母親ほど獣の群れを所有していないことを意識し、Circe の持つ魔力と自身の力を比較しているこ

とが窺える。そして次の引用文は the Lady の独白と弟達を探すための詩歌を聞いたあとに、Comus が発する台詞である。

... : I have oft heard

My mother Circe with the Sirens three, ...  
 Who as they sung, would take the poisoned soul,  
 And lap it in Elysium, Scylla wept,  
 And chid her barking waves into attention,  
 And fell Charybdis murmured soft applause:  
 Yet they in pleasing slumber lulled the sense,  
 And in sweet madness robbed it of itself,... (A *Masque* 251-60)

Comus は、the Lady の歌によって、かつて自分の母親が、その歌声で海の女の怪物の心をとらえ、その正体を奪ったという話を思い出している。そして今 Comus 自身が the Lady の歌声に心をとらえられている。その結果 Comus は the Lady を自分の妃にしようと言い、誘惑するのである。ここで考えられることは、Comus は自分の心をとった the Lady を、聴いた者の心をとる歌声を持つ母親 Circe と重ね合わせて考えているということである。Comus は、the Lady を介して Circe を意識し、心の奥底では血縁関係の母親との繋がりを欲していると考えられる。父親に対する Comus の言及はないものの、Comus が母親に抱く感情は、the Lady を通じて一種の性愛感情ともいえ、エディプスコンプレックス的であると言える。Jung は、息子の母親コンプレックスについて、母親が息子の男性性を刺激するように、息子も母親と同一化するか反抗して離れていくかという関係の中に、性的に引かれながら反発するという要因がつねに混じりこんでくるとなると述べているが (*The Archetypes and the Collective Unconscious* 85-6)<sup>11</sup>、この論は、Comus が the Lady を通して母親 Circe に対して抱えるコンプレ

ックス的要素にも当てはまると言える。the Lady を通して、内に秘めていた母親 Circe の存在を呼び起こすことになった Comus は、母親と自分の魔力を比較し、今はまだ Circe の持つ力には及ばないことを意識する。このことは、母親を目標の対象としつつも、母親に対して一種のコンプレックスを抱いているようにも見える。そして the Lady を妃とし、母親との同一化を図ろうとしていることが窺える。しかしながら、Comus は the Lady を誘惑するものの、結果失敗に終わる。しかも、劇冒頭で呼びかけた神的存在たちは登場せず、the Lady に対する誘惑も、母親 Circe との同一化も失敗になるのである。

### 3. the Lady と Sabrina の関係性

次に the Lady の親子関係について検証していく。冒頭の表にもあるように、Comus と比較しても、the Lady の肉親に関することは、ほとんど述べられていない。それに加えて、the Lady は、Comus の住む森で弟達とはぐれた際、実の両親や弟達の力、つまり血の繋がりによる助力を欲していない。むしろ、the Lady は以下の引用のように別のものに対して助力を得ようとしている。

O welcome pure-eyed Faith, white-handed Hope,  
 Thou hovering angel girt with golden wings,  
 And thou unblemished form of Chastity,  
 I see ye visibly, and now believe  
 That he, the Supreme Good, t'whom all things ill  
 Are but as slavish officers of vengeance,  
 Would send a glistening guardian if need were  
 To keep my life and honour unassailed. (*A Masque* 212-9)

the Lady は、三つの下線 “faith” , “hope” , “chastity” を擬人化したものに呼びかけ、至高の善なる者が輝く天使を派遣し自分の生命と貞節が襲われないよう守ってくれるだろうと独白している。そしてこの呼びかけの後に、the Lady はやっと自分の弟達を探すための詩歌を歌う。この点から、the Lady が何よりも、血の繋がりのない存在に対して救いを求めていることが窺える。実際、the Lady を解放するのは川のニンフ Sabrina である。Sabrina は、自らの務めを、“... ‘tis my office best / To help ensnared chastity; ...” (A Masque 907-8) と述べている。このような務めを担う Sabrina について、A. S. P. Woodhouse は、Sabrina が “chastity” を積極的、肯定的な徳として変容させる役割を担っていると論じており<sup>12</sup>、“chastity” の徳を証明するために、Sabrina が必要であると考えられる。また宮西光雄は、Severn 川の水神であると同時に、純潔な処女のニンフであると説明している。<sup>13</sup> そして、松浦は、Sabrina がその存在自体、処女性のシンボルであり、虐げられ、悩んでいる女性の力強い味方で、救済者であると説明している。<sup>14</sup> これらの点から、the Lady が呼びかけた擬人化された “chastity” というのは、“chastity” の象徴たる Sabrina であると言える。

本稿冒頭でも述べたように、Sabrina は水の精である。Jung は「水は無意識を表すために一番よく使われるシンボルであり、心理学的に言えば、無意識の中に沈んでしまった精神つまりガイストのことである」と説明している。<sup>15</sup> そのため、the Lady がいかなる手段に頼るよりも先ず、水の精である Sabrina に救済を求めたのは、無意識的なものからくると考えられる。また Jung は次のように述べている。

True, whoever looks into the mirror of the water will see first of all his own face. Whoever goes to himself risks a confrontation with himself....

This confrontation is the first test of courage on the inner way, a

test sufficient to frighten off most people, for the meeting with ourselves belongs to the more unpleasant things that can be avoided so long as we can project everything negative into the environment.... If you have an attitude of this kind [to give heed to a helpful idea or intuition, or to notice thoughts which had not been allowed to voice themselves before], then the helpful powers slumbering in the deeper strata of man's nature can come awake and intervene, for helplessness and weakness are the eternal experience and the eternal problem of mankind.... When you have done everything that could possibly be done, the only thing that remains is what you could still do if only you knew it.... Prayer, as we know, calls for a very similar attitude and therefore has much the same effect. (*The Archetypes and the Collective Unconscious* 20-1) <sup>16</sup>

この Jung の言葉を *A Masque* に当てはめると、次のように説明することができると思われる。先ず *A Masque* において、「水の鏡と向き合う」ことを想起させる場面として、the Lady の弟達を探すための詩歌が挙げられる。the Lady はその詩歌の中で、Echo に向かって、Narcissus に似た自分の弟達がどこにいるのか教えてほしいと歌っている。(A *Masque* 229-42) the Lady は実際に「水の鏡」と向き合っていないが、「水の鏡」を想起させるような詩歌を歌ったことにより、この詩歌に心奪われた Comus が the Lady にとって “unpleasant things” 不愉快なもの、つまり否定的アニムスとして the Lady の目の前に現れることになる。<sup>17</sup> この結果、the Lady は “risks a confrontation with herself” 「自分自身と出会う危険を冒す」ことになる。というのも the Lady と弟達がはぐれたのは、弟達が the Lady のために冷たい果実ないしは泉を探すためであり、Comus は、the Lady の抱える喉の渇きという弱みに付け込んで、肉欲に耽るための魔法の酒を飲むよう誘惑するのである。喉の渇きをしのぐために誘惑に屈して Comus の酒

を飲むという the Lady の内にある欲求と戦うために、the Lady は自分の中の否定的な面である Comus と対決することになる。こうした危機的状況に陥っている the Lady だが、この苦境においてもなお、the Lady は次のような “chastity” の教義を信じ、その教義を用いて Comus の言葉に反論する。

To him that dares

Arm his profane tongue with contemptuous words

Against the sun-clad power of chastity;

Fain would I something say, yet to what end?

Thou hast nor ear, nor soul to apprehend

The sublime notion, and high mystery

That must be uttered to unfold the sage

And serious doctrine of virginity,

And thou art worthy that thou shouldst not know

More happiness than this thy present lot. (*A Masque* 779-88)

Comus は、この the Lady の言葉を聞いてこの世の物ならぬ力が後楯となっていると感じ、冷や汗をかくことになる。しかしながら、Comus は誘惑の手をとめず、魔法の酒を飲ませようとさらに強要する。the Lady にとって絶体絶命の危機が訪れた時に、弟達がやって来て Comus を撃退する。しかし弟達の失策によって、the Attendant Spirit が Sabrina を呼び出し、Comus の魔法は解かれるのである。このように、危機的状況においても、“chastity” を一貫して信じ続けた結果、the Lady は Jung が論じているように、心の奥底にある救いの力が目覚め、Sabrina が実際に現れ、救済される。

なお、引用の下線部 “the sun-clad power of chastity” について、Akira Arai はルネッサンス期において “Sun” が God ないしは “Son of God” すなわちキリストを表すため、“Sun-clad” という句は “God-guarded” または



Infamous hills, and sandy perilous wilds,  
 Where through the sacred rays of chastity,  
 No savage fierce, bandit, or mountaineer  
 Will dare to soil her virgin purity,... (*A Masque* 415-26)

Akira Arai は、この the Elder Brother の言う “chastity” は、あらゆる不純をきよめる自足固有の力である一方、the Lady 自身の考え方とは異なると説明している。<sup>19</sup> 確かに弟達は、the Lady が捕えられている Comus の館を襲撃し、Comus から姉を救い出すことには成功する。しかしながら、それは the Attendant Spirit からの忠告があつてなされたものであり、さらに the Lady を縛る Comus の魔法を解くことには失敗する。the Elder Brother と the Lady それぞれが考える “chastity” 観に大きな相違点があり、血の繋がりのある者同士であっても the Lady を完全には救済できないため、一層 Sabrina との精神的な繋がりが強調されるのである。

## 結論

共に母親ないしは母親代わりとなるものとの繋がりのある登場人物として、Comus と the Lady を比較して検証した。Comus は最初、血の繋がりのない母親を抛り所とするものの、森でさまよう the Lady の存在に気が付いたために不完全な呼びかけに終わる。そして、the Lady を通して、むしろ血の繋がりのある母親 Circe を意識し、Circe との繋がりを求め始めた。その一方で the Lady は、キリスト教の “chastity” を希求し続け、その結果 “chastity” を具現する Sabrina と出会い、助けられ、Comus の魔法から解放された。Comus は両方の母親との繋がりを失ったが、それとは対照的に the Lady は精神的な母親とも言える存在と繋がりを、さらに肉親との繋がりを回復することができるのである。A *Masque* においては、血の繋がりに上に、Sabrina のようなキリスト教的なものへの信仰を通して、精神的に

繋がることによって、救済獲得に結びつくことが示唆されているのである。

\* 本稿はサイコアナリティカル英文学会第40回（平成25年度）大会（平成25年10月26日・於 神戸女子大学）で口頭発表した原稿に加筆訂正したものである。

### Notes

- 1 以降 *A Masque presented at Ludlow Castle, 1634* について言及する際、*A Masque* と省略する。本稿では、*A Masque* のテキストとして次のものを使用する。John Milton, *A Masque presented at Ludlow Castle, 1634. The Poems of John Milton*. ed. John Carey and Alastair Fowler. (London and Harlow: Longmans, 1968), pp. 168-229. なお、*A Masque* から引用する際、数字は詩行を表す。
- 2 松浦暢『水の妖精の系譜』（東京：研究社、2002）、pp. 4-10.
- 3 松浦暢『水の妖精の系譜』（東京：研究社、2002）、p. 90.
- 4 Sabrina が“chastity”を象徴するという点については、後ほど詳細に論ずる。
- 5 Jung の著作はドイツ語で執筆されているため、本稿で Jung の書物について言及、引用する際は R. F. G. Hull が英語に翻訳した *The Archetypes and the Collective Unconscious*. (New York: Princeton UP, 1971) を使用し、数字は頁数を表すこととする。この書物は、Jung が執筆した十本の論文をまとめたものを収録している。従って、これ以降 *The Archetypes and the Collective Unconscious* から引用する際、Notes で引用した論文名を明記する。
- 6 “Psychological Aspects of the Mother Archetype.” より。Jung, op. cit, p. 81.
- 7 “Psychological Aspects of the Mother Archetype.” より。Jung, op. cit, pp. 81-2.
- 8 “Psychological Aspects of the Mother Archetype.” より。Jung, op. cit, p. 85.
- 9 John Milton, *A Masque presented at Ludlow Castle, 1634. The Poems of John Milton*. ed. John Carey and Alastair Fowler. (London and Harlow: Longmans, 1968), p. 183 の脚注による。
- 10 William A. Oram, “The Invocation of Sabrina.” *Studies in English Literature 1500-1900* 24.1. (Houston: Rice University, 1984) : *Academic Search Complete*. Web. 1 May 2013. p. 122.

- 11 “Psychological Aspects of the Mother Archetype.” より。
- 12 A. S. P. Woodhouse, “Comus Once More.” *University of Toronto Quarterly* 19. 4. (Toronto: University of Toronto Press, 1950), p. 221.
- 13 ジョン・ミルトン 『ミルトン英詩全訳集 上巻』 宮西光雄訳、(東京：金星堂、1983)、p. 548.
- 14 松浦暢 『水の妖精の系譜』 (東京：研究社、2002)、p. 88.
- 15 C. G. Jung, *The Archetypes and the Collective Unconscious*. trans. R. F. G. Hull. (New York: Princeton UP, 1971), p.18-9. この箇所は “Archetypes of the Collective Unconscious.” より。
- 16 “Archetypes of the Collective Unconscious.” より。 Jung, *op. cit.*, pp. 20-1.
- 17 野呂有子は、Jung の理論を用いて執筆した論文「英国昔話『夫がくれた三枚の羽根』に関する覚え書」において、本稿で言うところの Comus のような誘惑者が、女性のアニムスの否定的な側面を象徴するという点について言及している。野呂有子「英国昔話『夫がくれた三枚の羽根』に関する覚え書」『東京成徳短期大学紀要』第 14 号 . (1981)、p. 66.
- 18 Akira Arai, “Milton in Comus.” *Studies in English Literature* 42. (Tokyo: The English Literary Society of Japan, 1965), p. 28.
- 19 *ibid.*, p. 21.



## *More Stately Mansions* に見られる Oedipus Complex の消滅

松 尾 かな子

Eugene Gladstone O'Neill (1888-1953) の作品には親子の愛憎が描かれているものが多数存在する。例えば、1924年初演の作品 *Desire Under the Elms* は亡き母を慕う息子が父親に復讐を果たそうとする物語であり、1931年初演の *Mourning Becomes Electra* は亡き父を慕う主人公 Electra と Electra の母親との軋轢と、弟と母親、弟と姉との近親相姦的愛憎を描いた物語である。O'Neill 自身、麻薬中毒の母、アルコール中毒で極度の吝嗇家の父、アルコール中毒の兄という機能不全家庭に育ち、必要とした際に家族からの十分な愛情を掛けてもらえずに、心の拠り所、特に母親からの愛情を生涯欲していた。本稿で扱う *More Stately Mansions* (1939) (以後、本稿では *Mansions* と記す。) にも O'Neill の母親と息子との関係性がよく顕われており、そこに Sigmund Freud の主要命題の一つである Oedipus Complex を読みとることが可能である。

*Mansions* は *A Touch of the Poet* (1939) の続編であり、O'Neill が1930年代に執筆を始めた11編から成る Cycle 劇——アイルランドから新大陸へ移民したある一家の年代記——の一部である。『詩人の気質』では、アイルランドからの移民である Cornelius Melody が Byron 卿に憧れるものの、Byron 卿とは似ても似つかぬ人生を歩み、ヤンキー貴族に完全敗北を喫して現実の自己を確認するに至るまでの様子と、Melody の娘 Sara が Henry David Thoreau のような生き方を目指す貴族階級の若者 Simon Harford と出会い、惹かれて、結婚するべく彼を誘惑するに至るまでの様子が描かれている。二人の心的プロセスについては、筆者が『サイコアナリティカル英

文学論叢第33号』で明らかにしている。本稿では、主に理想自我と現実の自己との間で揺れ動く Simon と、Simon に多大な影響を与える Simon の母 Deborah の2人について精神分析的な見地から分析し、そこに見られる Simon の Oedipus Complex の発露と消滅について3つのキーワードに沿って見ていく。

### 1. Deborah の庭

Henry Harford が建てた壮麗な邸宅の一角に Deborah の庭がある。庭には上から見ると八角形をした東屋があり、中国風の赤い塗料で扉が塗られている。O'Neill が Mansions の第一稿を完成させたのは、O'Neill が建てた中国風の家、通称 “Tao House” に暮らしていた時である。“Tao House” での第三夫人 Carlotta Monterey との生活は O'Neill の人生の中で幸福であったと Louis Sheaffer 著の O'Neill の伝記に記録されている。<sup>1</sup> O'Neill は10歳の時にカトリックの寄宿学校から帰省した際に、母親がモルヒネを注射している姿を目撃して以来、神への信仰を失い、その後西洋哲学や東洋の禅など様々な思想を渡り歩いたとされている。東洋風の “Tao House” は一時ではあったが、O'Neill に心の安らぎを与え、Deborah の心の安らぎを与える東屋へのインスピレーションに成り得たのかもしれない。Deborah の庭には様々な植木があり、どれも三角錐や円錐、四角錐、球体などの人工的な形に刈られ、ト書きにおいて “fantastic toy garden”<sup>2</sup> と称されている。Simon は Sara と出会う以前は Deborah の庭で Deborah と二人きりで過ごすことが多く、Deborah と共に Byron 卿の *Childe Harold's Pilgrimage* (1812-1818) の一節を暗唱していた。Simon の弟 Joel は Deborah の庭に入る際に “I have never been welcome here.”<sup>3</sup> と述べていることから分かる通り、Deborah と Simon は二人だけの濃密な時間を過ごしていたことが窺える。また、O'Neill の遺した書記に次の様な記述がある。

Garden is poetry, beauty, Nirvana, Bhavagad Gita—but diseased and morbid because blind flight from reality, denial of life, regression—because spirit is used by A, to regain entire possession of Simon—to make him child again and finally lead him back behind birth to life in womb without existence outside her.<sup>4</sup>

草稿では Deborah の名前は Abigail であったため、庭の使用者は A と記載されている。上記の記述からも、積み木を模したような植木と Deborah の心の拠り所である東屋があるこの庭は、Simon を呑み込み、取り込んでしまうような強烈な母性を放つ母胎の象徴そのものなのである。

ここで、Deborah と Deborah の夫 Henry との関係性を考察したい。夫が死去した際、Deborah は “And now Henry is dead. Gone from life forever. I am free.”<sup>5</sup> と言う。次の Deborah の台詞からも、夫婦としての愛情はとうの昔に失われていたことが窺える。

Joel will remember one night at supper when I actually asked my husband: “How is trade these days? Tell me. I feel a deep interest. Has President Jackson’s feud with the Bank of the United States had an adverse effect on your exports and imports?” A silence that shrank back, stamping on its own toes. In his eyes and Joel’s a wondering alarm. Has this alien woman gone completely insane? No, she is merely being fantastical again. Deborah has always been fantastical.<sup>6</sup>

Deborah と Henry 夫婦の関係が破綻していたことを考慮すると、Simon の幼少期には父親の存在が大きく影響を与えたとは考えにくい。つまり、Deborah の庭で濃密な時間を過ごしていた Simon にとって、最初の愛の対象である母親からの愛情を脅かす存在は、他にいなかったのである。この

Simon の Oedipus 期における父親の不在は、Simon の全能感を助長させ、Simon は無意識的に母親と結ばれようと努力するのである。Deborah は Simon が幼い頃、18世紀のフランス回想記をおとぎ話に変えて、話して聞かせたことがあった。その内容は、Stephen A. Black という O'Neill 研究家が指摘した通り、Simon に母親に対する性的な期待を抱かせるものであったのである。

...In Deborah's own fantasies, a summerhouse in the garden became a place of assignation where the king or the emperor met his mistress, a figure conjoined in the tales with the fairy enchantress and enacted by Deborah. Simon's youthful sexuality became focused on the gazebo, and later he half-believed it to be the place where his mother entertained regal lovers.<sup>7</sup>

しかしながら、Simon の幼年期における Oedipus Complex は Deborah 自身の手によって中断されることとなる。Deborah がこのおとぎ話を聞かせたのには理由があったのである。Simon は幼い頃、東屋の中に入ろうとしたことがあった。つまりは自分が母親と結ばれるべき間柄であること、自分と母親の愛する王や皇帝とを同一視していたのである。

## 2. Napoleon

Simon は母親からおとぎ話を聞かされた後、東屋の中に入ろうとしたが、当の母親によって拒否されてしまう。その時の心情を二人は次のように話している。

Simon—...I have never forgotten the anguished sense of being suddenly betrayed, of being wounded and deserted and left alone in a life in which

there was no security or faith or love but only danger and suspicion and devouring greed! (harshly) By God, I hated you then! I wished you dead! I wished I had never been born!

Deborah— (*with an obviously fake air of contrition thinly masking a strange, cruel satisfaction*) Did you, Dear? I am sorry if I hurt you. It is true I hoped you would guess what I meant. You were such a stubborn greedy little boy, so inquisitive and pryingly possessive. I could feel your grasping fingers groping toward every secret, private corner of my soul. I had come to the point when I even preferred Joel because I was utterly indifferent to him, where at times I hated you and wished you had never been born. So I had to do something to warn you, and I thought a fairy tale would be the most tactful way—...<sup>8</sup>

Simon は東屋に入ることを許されなかったことにより、Deborah の愛する人と自分が同じであるという同一視を中斷させられたのである。Deborah という愛着の目標を獲得することが出来ないと知り、Simon の Oedipus Complex は潜伏期へと入っていったと考えられる。フロイトは『エディプス・コンプレクスの消滅』で次のように述べている。

私は自我がエディプス・コンプレクスに目を向けなくなることを「抑圧」と名づけることに異存はない。もっとも、後年の抑圧は大部分この時期に形成される超自我の関与のもとに成り立つものである。(中略) もし自我が実際コンプレクスの抑圧という以上のことをやってのけることができなかつた場合には、それはエスの中に無意識的な状態でとどまり、後年その病的作用を發揮することになる。<sup>9</sup>

しかしながら、Simon の自分と皇帝との同一視は中断をさせられたものの、断念させられたわけではなかった。それは、後年になって再び顔を出してくるのである。Henry の死後、Henry が投資に失敗し、多額の借金を抱えていたことが明らかとなる。会社の存続が危ぶまれ、次期経営者として Simon に白羽の矢が立つ。Simon は Sara との身分違いの結婚により、Henry から Harford 家を勸当された身ではあったが、Deborah と Joel の説得により、亡き父の会社を自分の会社に吸収し、家族を連れて実家で Deborah と暮らすことを受け入れる。Deborah の内面におけるヘンリーの存在は大きくはなかったとは言え、Simon は名実共に父の社会的地位と家庭内に於ける地位の両方を手に入れたのである。しかしながら、Simon は母のいる実家に Sara と息子 4 人と暮らして 4 年ほど経った頃、仲睦まじく過ごしている妻と母のいる家庭内に居場所を見いだせずに、二人をかつて母と妻が自分を取り合っていたがみ合っていた頃の関係に戻そうと画策する。Simon は Deborah の庭を毎晩訪れ、再び二人きりの甘い時間を過ごすのである。この出来事をきっかけに Simon の全能感は幼年期のように大きくなっていく。中断されていた皇帝と自分との同一視が再開され、Simon の Oedipus Complex が発露するに至るのである。Simon は“(thinking) Yes, I think I can foresee every move of my present campaign here—not even Napoleon planning Austerlitz—Good god, what an insane comparison!”<sup>10</sup> と言って、自分と Napoleon とを比較し、同一視する。

また、Simon だけではなく、Deborah や Sara、Joel も Napoleon という言葉を劇中で繰り返し用いる。Deborah は愛読する 18 世紀フランスの回想記に登場する「時の権力者」であり、彼女が空想の中で彼女の東屋で逢瀬する恋人として、また彼女の父親や、彼女と Sara を意のままに操ろうと画策する Simon を形容するときに用いる。Sara は Simon の商取引の強引さや、また酒に酔っては威張り散らし、妻に苦労ばかりかけていた Sara の父親を形容する際に、Joel は弱者を容赦なく切り捨てる物欲と所有欲に

満ちた経営者としての Simon について形容する際に用いるのである。では次に、発露した Simon の Oedipus Complex がどのような様相を帯びてくるのか考察したい。

### 3. 二面性

Simon は大学を卒業後、Henry David Thoreau のような自給自足の生活に憧れ、森で生活をしていた時期があった。Simon は理想の社会の構築を夢見て、思想などを書き留めていたのである。そうした中、Simon は森の所有者の娘であった Sara が森を散歩している姿を目にし、Sara に性的な関心を持つようになる。貧しい生活から抜け出し、立身出世を夢見る Sara によって、Simon は誘惑され、関係を持ち、結婚するに至ったのである。その時の様子を Simon は次のように語っている。

...as when, that night at the cabin before we were married, she made me take her body so I'd be bound in honor to marry her, and then use me as a first step in her rising in the world!—as unscrupulous and ruthless as a whore selling herself!—if that hadn't happened, I might never have married her—the long engagement Mother advised might have opened my eyes to that common greedy nature hidden behind her beauty—the lust masquerading as love! <sup>11</sup>

上記の台詞から、亡き父親の会社を継ぎ、母親と暮らすようになると、母親と離れて暮らしている時には忘れられていた母親への愛着が刺激され、Simon のセアラへの想いが両価性を強めていることが窺える。母親の庇護の下では、妻は母と自分との仲を切り裂く悪女として捉えられるのである。Simon は Deborah の庭で Deborah に “I regret I have lost that paradise in which you were the good, kind, beloved, beautiful Queen. I have become so

weary of what they call life beyond the wall, Mother.”<sup>12</sup> と告白するのである。Doris Alexander が “In *More Stately Mansions* the dual mother is represented by the womblike Chinese summer house in the garden, which has come to symbolize for Simon his mother’s identity.”<sup>14</sup> と指摘している通り、Simon は心地よい母胎としての庭の復活を望み、再び母親の愛する存在になろうと試みるのである。一方、Sara への愛情は、肉欲へとすり替えられる。Simon は Sara の立身出世欲を巧みに利用して Sara に会社の経営を手伝わせ、会社では Simon の愛人になるように頼むのである。“I never felt we were alone—there, in Mother’s house.”<sup>14</sup> という Simon の台詞はもはや家庭内における Sara との夫婦生活は機能していないことを象徴しているのである。しかしながら、Simon は Deborah では叶わない肉欲の充満を Sara に求め、職場では毎週のように娼婦のような露出の多い服を Sara に買い与えて着せるのである。

それでも、Simon は Sara のことを疎ましく感じるようになる。なぜならば、Simon の libido が無意識下では Deborah に向けられているからである。Deborah もまた、愛憎の二極的な態度を Simon に向けて Simon の心を揺さぶるのである。Simon が Deborah の庭を毎晩訪れたいと話した際には、“Oh, I am so happy—so happy, Dear!—to have my son back!”<sup>15</sup> と喜びに満ち溢れ、一方で東屋に一人で居る際には次のように Simon や Joel を出産したことについて否定的な想いを抱くのである。

...sit there for hours in wisdom-ridiculing contemplation of myself, and spit meditation—in my mind, and spit in my heart, like a village idiot in a country store spitting at the belly of a stove—cursing the day I was born, the day I indifferently conceived, the day I bore—.<sup>16</sup>

Simon は Deborah の相反する感情に揺さぶられ、徐々に心身の平衡を崩

していく。Simonの無意識下では身も心もDeborahと結ばれたいという本能と、母親と結ばれてはならないという超自我とが葛藤するのである。しかしながら、心身の平衡を崩していたのはSimonだけではなかった。Deborahの内面もまた、揺れ動いていたのである。

Simon— (*coldly*) You are compelling me to choose her. (*He lets go her hand.*) Very well. I shall go to her. Do not attempt to follow me in the house. I shall lock you out as you once did me. You will stay here alone until you do what you must do to escape. I have no doubt you will find happiness in a foolish dream as a King's courtesan! And I shall be free to be Sara's—body and soul. Goodbye, Mother. (*He turns to go.*)

Deborah— (*grabs his hand—pleading frantically*) No! For God's sake, don't leave me alone here! I will do anything you ask!<sup>17</sup>

互いに愛情を確かめあうように揺さぶりをかけている様子はまさに二人が共依存の関係性にあることを表している。相手を傷つけるような言葉を投げかけることで相手を意のままにコントロールしようとしている二人の姿は端から見ると病的であり、二人の間に安定した愛情関係が構築されていないこと、引いては母親が安全基地として十分に機能していないことが認められるのである。精神科医の岡田尊司は『愛着障害』の中で次のように述べている。

不安型の方は、幼いころから養育者に、過保護に甘やかされる一方で、親の意に沿わないと、強く拒否されるといった、極端さのなかで育っていることが多い。そのため、甘えたい、愛情を求めたいと願う一方で、またいつ手痛い仕打ちが待っているかもしれないという気持ちも抱いている。愛情が無条件のものではなく、

状況が変われば見捨てられるという思いを消せないのである。<sup>18</sup>

Simon はまさにこの不安型の人と言えるのである。かつて Simon が Deborah の庭の東屋に入ることを望むように Deborah に仕向けられ、それを拒否されたことは、Simon の心に大きな傷跡を残し、その傷はいつまでも癒えないでいる。Simon はその傷を癒すために再び、自分と皇帝との同一視を行い、Deborah に心身ともに受け入れてもらうこと、愛してもらうことを望むのである。Simon の無意識下では、Deborah と結ばれたいという本能がそれを拒否する超自我を抑圧する。その際、Simon の意識は Sara と出会う以前の、Deborah に拒否される以前まで引き戻されるのである。Simon は再び、Deborah に東屋の中へ自分を連れて行くように促す。

Simon— (in same tone) The actual door there is a necessary concrete symbol. Your opening it and leading me inside will be the necessary physical act by which your mind wills to take me back into your love, to repudiate your treachery in driving me out of your heart, to deny the evil ruthless woman your dreams of freedom made you and become gain your old true self, the mother who loved me alone, whom alone I loved! <sup>19</sup>

このように、Simon の Oedipus Complex は幼少期に母親に拒絶されて中断されていたものの、後年、母親が手に入りそうな状況になった時に再び発露し、その程度を強めていったのである。しかしながら、Simon の痛切な願いはまたも Deborah によって断ち切られることとなる。

Deborah— (*flings his hand away—with a strange boastful arrogance*)  
Alone, I said! As I have always been. As my pride and disdain have

always willed I be!—hating the vile sordid ugliness of life—choosing to keep my spirit pure and untouched and unpossessed!—my soul my own!—at any cost—at any sacrifice— (*looking at him now with repulsion*) Go away! Do not dare to touch me! What are you to me! I am my own! Ah, how could I have ever been so weak as to allow you to intrude on my dream and involve me in a filthy sordid intrigue with a greedy, money-grabbing merchant and his peasant slut of a wife! I, if I had been born in a nobler time, could have had the love of a King or an Emperor! (*to Simon with hatred*) You—get back to the greasy arms of your wife where you belong! (*With extraordinary strength she gives him a push in the chest that drives him off balance and sends him spinning down the steps to fall heavily and lie still by the stone bench at left of pool.*)<sup>20</sup>

Deborah が最終的に選んだのは彼女自身である。庭の東屋は Deborah にとって胎内の中枢部、言い換えれば彼女にとっての安全基地なのである。Arthur and Barbara Gelb を筆頭に多くの O'Neill 研究家が、Deborah が東屋にこもる姿と、*Long Day's Journey into Night* の Mary Tyrone がモルヒネの効力により空想の世界にこもる姿に共通点を見出している通り<sup>21</sup>、Deborah と Mary には共通項が多く存在し、二人は O'Neill の母親を指していると考えられる。Deborah はいつも白い服を身につけ、ト書きにおいて “*There is something about her perversely virginal.*”<sup>22</sup> と形容されている。Simon に対して両価的な想いを抱いており、上記の台詞にある通り最終的には精神世界に生きることを選ぶのである。純血でありたい、誰のものにもなりたくないという Deborah の想いは Melanie Klein の言葉を借りるなら「内在化された男根に対する女性の恐怖」<sup>23</sup> そのものであり、その根源は母親にあると考えられるのである。Klein によると、「母親に対する

憎しみは、父親の男根を望ましい寛容な対象から危険で邪悪な対象へと変え」<sup>24</sup>、Deborah は Deborah の母親との間に基本的信頼を築けず、母親が安全基地として機能していなかったことを窺わせるのである。そして、Deborah は実の子をどのように愛せば良いのか分からず、時に我が子を可愛く思い、時に子の存在を認めたくなくなるような両価的な想いを抱くようになったのである。つまり、Deborah は子どもに安定した愛情を注げない自分に苦しんでいるのである。

Simon は Deborah に拒絶されて東屋の階段から落ち、“stupor” の状態に陥る。この時、Simon の無意識下では愛する対象を失ったことに対する強い心的反応が起こっていたのである。いみじくも、フロイトは論文「悲哀とメランコリー」において、次のように書いている。

現実検討によって愛する対象がもはや存在しないことが分かり、すべてのリビドーはその対象との結びつきから離れることを余儀なくされるがこれにたいし当然の反抗が生ずる—よく見られることだが、人間はリビドーの向きを変えたがらず、かわりのものが、もう誘っているというのにそれでも変えないものである。この反応は強いため、現実から顔をそむけることになり、幻覚的な願望精神病になって対象を固執することになる。正常であることは、現実尊重の勝利をまもりぬくことであるが、その使命はすぐには果たされない。それは時間と充当エネルギーをたくさん消費しながら、ひとつひとつ遂行してゆくのであって、そのあいだ、失われた対象は心の中に存在しつづける。リビドーが結ばれている個々の対象の追想と期待に心をうばわれ、過度に充当され、リビドーの解放もそこに実現されるのである。<sup>25</sup>

Simon は一年以上もの間、“stupor” の中で Deborah への愛憎の念と対峙し、

悲哀の仕事を完了させていく。また、Sara は立身出世欲を捨て、Simon の会社を倒産させると、子ども四人と Simon を連れて元々所有していた農場へと身を落ち着かせるのである。Simon はようやく“stupor”から目を覚まし、Deborah に求愛した記憶をすっかり失う。Simon が思い出せるのは孫に囲まれた幸せそうな Deborah の姿だけなのである。Simon の libido は悲哀の仕事を経て、Deborah という対象充当をついに放棄し、Deborah に対して穏やかな、性的満足を求めない愛情を抱くに至ったのである。つまり、Simon の libido は悲哀の仕事の完了とともに、Oedipus Complex の段階から脱却するに至ったと考えられるのである。

Sara は Simon に “I’m your mother now, too. You’ve everything you need from life in me!”<sup>26</sup> と伝える。Sara は愛する夫のために健気に尽くすことを決意するのである。Sara は四人の息子を産み育て、夫に愛情を伝え、夫が望めば夫の愛人となり、会社をも手伝った。夫に療養が必要だと分かると、長年の夢でもあった立身出世でさえも諦められるのである。まさに Sara は O’Neill が理想としていた “wife, mistress, mother, nurse and secretary”<sup>27</sup> という女性像を表している。豊穡の女神のように温かく Simon を胸に抱く Sara は、夫と子どもたちの幸せを最優先させるという力強い信念に溢れ、そこには一筋の不安もなく、彼らの未来を明るく照らし出している。

*More Stately Mansions* という題名は、アメリカの詩人 Oliver Wendell Holmes (1809-1894) の “*The Chambered Nautilus*” の一節に由縁している。内面の成長と自由を謳ったこの詩の内容を鑑みると、*More Stately Mansions* という題名は、Cycle 劇の題名として付けられていた “*A Tale of Possessor, Self-Dispossessed*” という物欲と所有欲に捕われた登場人物たちの魂の解放を表しており、決して留まるところを知らない人間の所有欲を揶揄するものではないと解釈できるのである。Holmes が同詩の末節に “Leaving thine outgrown shell by life’s unresting sea!” と書いた通り、O’Neill は人が人としての尊厳を保ちながら、成長を続けていくべきであり、その

努力を続けることについて意義を見いだしていると解釈できるのである。ここにまた O'Neill の登場人物への愛情の眼差しを読み取ることが出来るのである。

### Notes

- 1 Louis Sheaffer, *O'Neill: Son and Artist, Volume II*, (New York: Cooper Square Press, 2002), p. 479. に “Of all the places where he and Carlotta lived, O'Neill seems on the whole to have like Tao House best.” と記載されている。
- 2 Eugene O'Neill, *Complete Plays 1932-1943*, (Travis Bogard ed., New York: The Library of America, 1988), p. 338.
- 3 *Ibid.*, p. 340.
- 4 Holographs by O'Neill, at the Beinecke Library at Yale
- 5 Eugene O'Neill, *op. cit.*, p. 343.
- 6 *Ibid.*, p. 342, 343.
- 7 Stephen A. Black, *Eugene O'Neill: Beyond Mourning and Tragedy*, (Boston: Yale University Press, 1999), p. 406.
- 8 Eugene O'Neill, *op. cit.*, p. 534, 535
- 9 井村恒郎、小此木啓吾訳『フロイト著作集第六巻』（京都：人文書院）、313 頁。
- 10 Eugene O'Neill, *op. cit.*, p. 452.
- 11 *Ibid.*, p. 393, 394.
- 12 *Ibid.*, 434.
- 13 Doris Alexander, *Eugene O'Neill's Last Plays: Separating Art from Autobiography*, (Athens: The University of Georgia Press, 2005), p. 162.
- 14 Eugene O'Neill, *op. cit.*, p. 408.
- 15 *Ibid.*, p. 447.
- 16 *Ibid.*, p. 433.
- 17 *Ibid.*, p. 532.
- 18 岡田尊司『愛着障害子ども時代を引きずる人々』（東京：光文社、2011）、211 頁。
- 19 Eugene O'Neill, *op. cit.*, p. 534.
- 20 *Ibid.*, p. 543.

- 21 Arthur and Barbara Gelb, *O'Neill: Life with Monte Cristo*, (New York: Applause Theatre & Cinema Books, 2002), p. 114. くに、“Deborah frequently withdraws into the seclusion of a “summer house” on the grounds of her estate, where she indulges in romantic daydreams of being Napoleon’s mistress—a symbolic version of Mary’s withdrawal into morphine-induced reveries of her romanticized past life.” と記載されている。
- 22 Eugene O’Neill, *op. cit.*, p. 314.
- 23 小此木啓吾・岩崎徹也編訳『メラニー・クライン著作集 2 児童の精神分析』（東京：誠信書房、1997）、243 頁。
- 24 *loc. cit.*
- 25 井村恒郎、小此木啓吾、*op. cit.*, 138 頁。
- 26 Eugene O’Neill, *op. cit.*, p. 558.
- 27 Barbara Gelb, “O’Neill’s Seething ‘Interlude’ Returns to Broadway”, (New York: The New York Times, February 17, 1985).



## “The Magic Barrel”におけるLeoの成長と Salzmanの存在意義

有働牧子

Bernard Malamud の “The Magic Barrel” (1958) は、タイトルにも表れているように、どこか空想的で、捉えどころのない不思議な印象を残す作品である。それゆえ読者の自由な解釈を可能にするものでもあるが、その最たるものは、Salzman を超自然的な存在と見なすものではないだろうか。このような解釈を採用した論文は少なからず存在し、中には、この解釈が妥当か否かに焦点を当てて分析した精緻な論文もある<sup>1</sup>。作品中、この解釈を可能にした要因は随所で見られるが、比喩的なものを除けば以下の二点に絞ることができるだろう。第一に、作品の “Not long ago there lived in uptown New York. . . Leo Finkle”<sup>2</sup> という書き出しである。つまり、重要な導入部において昔話やおとぎ話の言い回しが用いられているために、その先に描き出される世界にもまた、そこはかとなくファンタジーの雰囲気を与えられているのである。さらに、二つ目の要因として、Leo が Salzman に対して抱く印象が挙げられる。Leo は、Salzman に紹介された女性との見合いの最中であって、その場にいないはずの Salzman に監視され、事のすべてを操られているという感覚に陥る。また、最終的に Stella との結婚を決意した時にも、ふと、これもまた Salzman の思惑ではないかという思いがよぎるのである。

しかしながら、そもそも Malamud 自身がこの作品について “The story has been interpreted in two ways, as realism and fantasy. I had meant it to be realistic”<sup>3</sup> と述べていることを無視すべきではない。このように作者の意図がはっきりしている以上、その印象はどうであれ Salzman は超自然的な

存在などではなく、Leoと同じ次元に生きる存在なのである。そして、解釈の方向性として妥当であるのは、Salzmanがファンタジーか否かではなく、なぜ彼にそのような印象が付与されているのか、というものだと思う。したがって、本稿では、あくまでSalzmanは実在しているという立場で、しかし彼の独特の印象にも着目しながら、主人公であるLeoとの関係性を考察する。さらに、その考察をもとに、作品の中でLeoがどのような心的変遷を辿り、どこに行きついたのかについても明らかにしたい。

作品の最初に紹介される通り、結婚を意識し始めてSalzmanに出会うまでの6年間、Leoはラビになることを目指して勉強だけに励んでいた。しかし、大学を卒業して聖職者になる日が近づきつつあった彼の耳に入ってきたのは、自分の教区を得るのに妻帯者であることが優位に働くらしいという知人の言葉であった。そうしてSalzmanと接触するまでの間、“after two tormented days of turning it over in his mind” (193) という描写からも窺えるように、結婚という外的な圧力を受けたLeoの心はすでに揺らぎ始めていた。当然、この揺らぎを発端として物語は展開していくのであるが、もし外部からの一方的な圧力だけだったら、この作品は今あるような豊かさは持ち得なかったはずである。実はこの時のLeoにはもう一方の、しかも反対方向からの圧力も同時に押し寄せていて、激しい揺らぎのための条件が揃い始めていたのである。

外的な圧力に対するもう一方の圧力は、まず、彼がSalzmanに初めて会った時に並べたてる言い訳めいた主張によく表れている。その主張の中でLeoは、結婚仲介業者に対する拒否感や嫌悪感を抑えこむかのように、自らの両親に対する敬意や、その両親の結婚を実現させたものでもある結婚仲介業という職業の価値と美徳を長々とまくしたてる。両親や伝統的価値観と結びつけられたこのような主張は、精神分析的に見れば超自我的な圧力だと言える。超自我とは、エディプス・コンプレックスの遺産として、

母に対する欲望を抑圧するために行われる父との同一視が基になったものであり、自我にとってのいわば規律（理想）である。ただし、抑圧のために取り込んだとは言え、エディプス期に芽生えた当初の性的欲望と深く関わっていることには変わりなく、また、父を取り込むことは母との対象関係にある程度可能にするものでもあるため、この超自我は「意識的自我からの独立と無意識的なエスとの親密な関係」<sup>4</sup>を示す。これらのことを踏まえて考えると、Salzman に対する Leo の言い訳めいた主張は、彼の内部からの圧力を示すものであり、しかも超自我ばかりでなく、快感原則に支配されるエスとも強いつながりを持つものだったと言える。

確かに Leo は、Salzman との会話の中で、希望の女性像を聞かれたときには決まって赤面している（195, 201）。また、女性の家族構成や経済的状况よりも外見にこだわっているようで、家に来た Salzman に向って、まず “Do you keep photographs of your clients on file?”（195）と質問するのである。フロイトが、意識的表象と無意識的表象の違いについて、その表象が言語表現と結びついているか否かだとしていることを考えれば、このように視覚的な面にこだわる Leo は、やはりエスからの無意識的圧力を受けているとすることができる。このことは、作品の中で、象徴的な情景描写によっても暗示されている。Salzman の隣で窓の外を見つめていた Leo の眼前には、次のような光景が広がっていたのである。

He now observed the round white moon, moving high in the sky through a cloud menagerie, and watched with half-open mouth as it penetrated a huge hen, and dropped out of her like an egg laying itself. (195)

そして、最終的に Leo は、まるでエスの無秩序を象徴するかのように “wild” という形容詞を冠された、娼婦をしていたのであろう Stella に惹かれていくのである。

自我は「本来受動的にふるまうもの」<sup>5</sup>である。Leo もまた、外部（現実・知覚）と内部（超自我・エス）の二方向からの圧力を一身に受け、葛藤する自我だったと言える。そのことを巧みに表すのが、Leo を指す表記の変化である。結婚という外的な圧力に続いて、既に述べたように内的な圧力を露見させる主張が提示された後、Leo の表記は“Finkle”から“Leo”に変わっている。ファミリー・ネームからファースト・ネームへのこの変化は、両親への敬意や宗教という伝統的価値で一応は統一されていた自我の破綻を反映している。そして、注目すべきはその変化の内容だけではなくタイミングである。“Finkle”という表記が使われるのは、Leo の言い訳めいた主張を聞いた Salzman の描写が最後である（ただし、“Leo Finkle”というフルネームの形では作品の後半にも登場する）。

Salzman listened in embarrassed surprise, sensing a sort of apology. Later, however, he experienced a glow of pride in his work, an emotion that had left him years ago, and he heartily approved of Finkle. (194)

ここで描かれているのは“Finkle”と Salzman の共鳴であり、同一化にはほかならない。冴えない仲介業者になり果てていたはずの Salzman は、Leo の“Finkle”としての言動に再び命を吹き込まれるようにして自尊心を取り戻した。それと呼応するようにして、“Finkle”という統一された自我は姿を消し、“Leo”という葛藤する自我が登場するのである。このことは、Salzman が物語の中で現実中存在していると同時に“Finkle”の分身としても存在し、Leo の内的圧力が投影されたものであることを示唆している。

精神分析的に見れば、このような Salzman の存在は、Leo の葛藤を展開させ、その後の成長を促す上で非常に意義深い。外的刺激を受けた Leo は、それに対抗する内的刺激をも誘発されることで葛藤の道を歩み始めた。そして彼はこの内的刺激を糸口にして、無意識に潜む自らの真実に直面して

いくことになる。しかしながら、この内的真実の類は大部分が抑圧されたものであるため、本人が能動的に見出し、受け入れていくのは難しい。フロイト曰く、「抑圧されている表象ないし思考内容は、それが否定されるという条件のもとで意識の世界の中に入り込んでくることができる」<sup>6</sup>。したがって、「分析を受けている患者が『そんなことを考えたことはありません』とか、『そういうことは考えたことが（一度も考えたことは）ありません』というような言い回しで分析に反応を示すときほど、無意識的なものの見事な発見を証明するものはない」<sup>7</sup>のである。このことから分かるのは、人間にとって最も奥底にあるものが再び意識されようとするとき、それは「抑圧の過程によって疎遠にされたもの」<sup>8</sup>であるために見知らぬものの印象を与え、外から到来したように見えるということである。実際に作品の中で Leo がしばしば Salzman を追い出したり、自分には彼など必要ないと思いつつもしたりすることからも窺えるが、この所謂「外密の論理」に沿って Salzman は存在し、Leo の葛藤と成長を促すのである。

果たせるかな、自我の統一性が崩壊した後の“Leo”は、Salzman との面会をターニング・ポイントとしながら葛藤の道を歩いていく。既述のように Leo の言葉で自尊心を取り戻した Salzman であったが、その仕事は依頼人である Leo を満足させるものではなかった。彼がファイルから取り出す女性たちはどこかに必ず（少なくとも Leo にとっては）欠点を抱えていて、取り戻したはずの自尊心はみるみるうちに空洞化していくのである。そしてこの姿を見た Leo もまた沈んだ気持ちになり、その原因を探るうちに次のような疑いを抱くことになる。

But when Leo found himself hesitating whether to seek out another matchmaker, one more polished than Pinye, he wondered if it could be —his protestations to the contrary, and although he honored his father and mother—that he did not, in essence, care for the matchmaking

## institution? (199)

ここにおいて Leo は、当初の Salzman への主張とは裏腹に、自分の両親やユダヤ人の伝統的価値観に関わる結婚仲介業に対する懐疑心を抑えきれずにいる。つまり、自らの職業的価値に実を与えられない Salzman を目の当たりにして、Leo もまた両親や伝統的価値観に支えられていたこれまでの自分を疑い、その破綻に直面しているのである。しかしながら Leo はこの直後に、これまでの自分を支えてきたものの一つである本に没頭することでその考えを否定し、落ち着きを取り戻している (“By nightfall, however, he had regained sufficient calm to sink his nose into a book and there found peace from his thoughts.” [199])。ところがそこへ絶妙のタイミングで再び Salzman が姿を見せ、彼の心を揺さぶるのである (“Almost at once there came a knock on the door. Before Leo could say enter, Salzman, commercial cupid, was standing in the room.” [199])。この出来事もまた、Salzman が「外密の論理」に従って存在し、Leo の葛藤を促していることの表れである。

Salzman に紹介された Lily Hirschorn との見合い中、Leo が Salzman を意識せずにおれないのも、彼が Leo の分身としてその心理に深く関わっているためである。上記のように Salzman の存在や行動に心をかき乱されながら見合いに至った Leo は、必然的に、またしても彼が裏で操っていると思わずにはおれないのである。しかしもちろん Salzman は実際にはその場になかったので、この時の Leo は彼の「魔法の樽」から出現した、いわば彼の手先としての Lily に触発されて、自分の真の姿に向き合わされることになる。Salzman に吹き込まれたせいで Leo に対して尊大な妄想を抱いていた Lily に向って、彼は思いがけず “I came to God not because I loved Him, but because I did not” (204) と告白し、その後には次のような自己認識に至るのである。

Her probing questions had somehow irritated him into revealing—to himself more than her—the true nature of his relationship to God, and from that it had come upon him, with shocking force, that apart from his parents, he had never loved anyone. Or perhaps it went the other way, that he did not love God so well as he might, because he had not loved man. It seemed to Leo that his whole life stood starkly revealed and he saw himself for the first time as he truly was—unloved and loveless. This bitter but somehow not fully unexpected revelation brought him to a point of panic, controlled only by extraordinary effort. (205)

ここにおいて「神」というモチーフを使って表現されているのは、人間にとって根本的なエディプス・コンプレックスの結果生じた親との関係と、自我が経験した挫折である。先にも少し触れたが、エディプス期において母に対する性的願望を抱いた男児は、通常、父との同一視、すなわち父を自らのうちに取り込むことによってその願望を抑圧する。つまり「両親、ことに父がエディプス願望の実現の妨害者としてみとめられるので、幼い自我は、これとおなじ妨害者を、自分のうちにもうけることによって、この抑圧行為にたいして自分を強力に」<sup>9</sup>するのである。このことはまさに Leo が言うように、「神（父）を愛しているからではなく愛していないから近づいた（取り込んだ）」ということであり、自我にはその根本において愛の挫折（unloved and loveless）があることを意味している。このような認識が Leo にとって「つらいが、まったく予期されていなかったわけではなかった」のは当然である。その真実は彼にとって何ら新しいものではなく、かつての自我が経験したエディプス・コンプレックスという、意識されずとも無意識の中に潜み続けていた“親しいもの”だったからである。

そして、しばらくした後、落ち着きを取り戻した Leo は、一見すると

成長と思えるような様子を見せる。

But gradually, as the long and terrible week drew to a close, he regained his composure and some idea of purpose in life: to go on as planned. Although he was imperfect, the ideal was not. As for his quest of a bride, the thought of continuing afflicted him with anxiety and heartburn, yet perhaps with this new knowledge of himself he would be more successful than in the past. Perhaps love would now come to him and a bride to that love. And for this sanctified seeking who needed Salzman? (206)

しかしこれは成長とは言い難く、先の自己認識への恐れないしは否定と見なす方が妥当である。当初の愛の挫折を自覚した Leo は、そのことによって愛の到来を予感して気力を取り戻し、その先に成功を見据えているように見える。しかし実際は、直面した「不完全な」自己に耐えられず、それを覆い隠すものを期待しているに過ぎず、内的な刺激は健在だったに違いない。というのは、ここにおいて Leo が「誰が Salzman など必要とするだろうか?」と言っていることは、上述したフロイトの「否定」の論理にしたがえば Salzman の抑圧しがたさを表すものであるし、この引用部の直後、もはや定石とも言えるタイミングで姿を現した Salzman に関して、いかにも執拗な “a skeleton with haunted eyes” (206) という描写があるからである。やはり彼の中にはまだ超自我やエスからの刺激がくすぶっており、早々と “sanctified” としてしまうには程遠かったのである。

それでも Leo はそのことから目を背けようとする。Salzman を追い払い、自力で「愛」を与えてくれる相手を見つけようとするのである。しかしながらこうした逃避はうまくいくはずもなく、間もなく彼の目は再び自分に注がれることになる。

One morning Leo toiled up the stairs to his room and stared out the window at the city. Although the day was bright his view of it was dark. For some time he watched the people in the street blow hurrying along and then turned with a heavy heart to his little room. (208)

そして、まずは Salzman が残していった何枚かの写真を相手に、Leo の内的な刺激は再び姿を現しはじめ (With a sudden relentless gesture he tore it open. For a half-hour he stood by the table in a state of excitement, examining the photographs of the ladies Salzman had included. [208、下線筆者])、ついにはその中の一枚に「欲情を抱く (desire)」のである。

Her he desired. His head ached and eyes narrowed with the intensity of his gazing, then as if an obscure fog had blown up in the mind, he experienced fear of her and was aware that he had received an impression, somehow, of evil. He shuddered, saying softly, it is thus with us all. (209)

後に Salzman が “She is a wild one—wild, without shame” (212) と表現していることから分かるように、Leo が「欲情を抱いた」Stella はエスの象徴である。先に述べたようにエスと超自我は密接に関係するものであるため、この Stella が Salzman の娘として登場するのも十分納得がいく。また、Stella の写真を見た Leo の頭の中が「霧がかかったように」なるのも不思議ではない。自我にとって未知で無意識的なエスは「まったく無道徳」<sup>10</sup>で、そもそもその名称の元になっているのは、ニーチェが「われわれの本質の中の非人間的なもの、いわば自然必然的なものについて」<sup>11</sup>いつも使っていた非人称の表現だからである。聖職者を目指す Leo はこのような

彼女に「悪」を見出すが、しかしながらここには彼の成長がはっきりと見てとれる。フロイトの「否定」の論理に従うように、自分の内面が投影された Salzman をたびたび蔑ろにし、目を背けようとしていた Leo であったが、ここにおいてついに観念したかのように、Stella に投影された自らの内的真実をさして「我々すべてにつきまとうもの」と認めるのである。

それでも Leo は、実際に Salzman から Stella の身の上を知らされると狼狽を禁じ得ず、それまでの価値観に真っ向から対立する女性を強く求める自分に悩んだ。しかしどうしても諦められないと分かった Leo は、彼女に会うことを Salzman に懇願するのである。ただしそれは自分の欲望を無理やり押し通し、それまでの道徳や価値観との決別を意味するようなものではなかった。

He then concluded to convert her to goodness, himself to God. The idea alternatively nauseated and exalted him.

He perhaps did not know that he had come to a final decision until he encountered Salzman in a Broadway cafeteria. He was sitting alone at a rear table, sucking the bony remains of a fish. The marriage broker appeared haggard, and transparent to the point of vanishing.

...

“Put me in touch with her, Salzman,” Leo said humbly. “Perhaps I can be of service.” (213)

Leo が悩んだ末に見出したのは性的欲望の発散ではなく道徳的な道であった。この後の “She wore white with red shoes, which fitted his expectations, although in a troubled moment he had imagined the dress red, and only the shoes white” (214) という記述でも暗示されているように、Stella に対する Leo の性的欲望は非性化、すなわち昇華されたのである。上に挙げたような境

地に達した Leo は、エディプス・コンプレックスの崩壊の時と同じように、そのリビドーを Stella という対象から「神」へ、彼にとってはそれまでの自分を作り上げてくれた、いわば父なるものへと向けた。そして、やはりエディプス期の崩壊の時と同じように、それによって Stella との純粋な対象関係は挫折させられたかもしれないが、彼女を「回心させる」という新たな目標が見出され、関係の断絶は免れたのである。花束を抱えた Leo が駆け寄ろうとする Stella の目について、それまでは仄めかすだけにとどめられていたものがついに “clearly her father’s” (214) と明記されるのは、破綻しかけていた超自我ないしは自我理想の復権にほかならない。言うまでもなく、彼女の父親である Salzman はもともと “Finkle” という Leo の超自我的側面が作り出した人格でもあるからだ。フロイトは、エディプス期の崩壊における父との同一視（自我理想の成立）と母への願望の抑圧を説明しながら、「対象リビドーが自己愛リビドーに変わることは、明らかに性的目標の放棄をもたらし、非性化 Desexualisierung、すなわち一種の昇華 Sublimierung をもたらす」<sup>12</sup> と述べている。Leo もまた、Salzman に投影されていた “Finkle” としての自己をふたたび自らのうちに抱き、愛し始めたのである。

フロイトは自我と超自我について「超自我は、かつての自我の弱体と依存性の記念碑であり、成熟した自我に対してもその支配をつづける。子供がその両親にしたがうように強制されているように、自我はその超自我の至上命令に服従する」<sup>13</sup> と述べている。先の引用部にあったように、Leo の “I can be of service” という決断は、消え入りそうなほどの破綻を見せる結婚仲介業者 Salzman を目の当たりにした時に初めて自覚された。フロイトの記述を考慮すれば、Salzman の弱々しさは超自我の弱体化などではなく、Leo の心の不安を反映すると同時にその依存性を煽るような、根強い支配力を誇る超自我のいわば策略だったとも言える。だからこそ Leo は Salzman との別れ際に、“he was, however, afflicted by a tormenting suspicion

that Salzman had planned it all to happen this way” (213) という思いを抱くのである。

そして、この作品は“Around the corner, Salzman, leaning against a wall, chanted prayers for the dead” (214) という一文で終わる。この記述に先立って Salzman は“to me she [Stella] is dead now” (212) と発言しているため、一見すると最後の祈りもまた、彼にとっては死んでも同然と見なされている Stella に向けられたものと思える。しかし、本稿で述べてきた Salzman の役割や Leo の心的変遷を考慮すれば、その真の対象は明らかである。すなわちこの死者とは Salzman 自身にほかならず、より厳密に言えば、Leo の内面が投影され、その葛藤を促す役割を果たしていた Salzman なのである。Leo の昇華という成長が達成されたいま、彼はついに御役御免となったのである。しかしながら、このような解釈は、本稿の冒頭で紹介した作者の“to be realistic”という意図に反するものでもある。Malamud は Lily との見合いの場面などでも Salzman にファンタジックな行動をさせているが、そこではあくまで Leo の空想という体裁が守られていた。この作品が“fantasy”ではなく“realistic”なものである以上、最後の場面もそれを踏襲していて、Salzman は Stella に対して祈りを捧げたのだと見なす方が妥当かもしれない。しかしここで思い出されるのが、冒頭でも指摘した、書き出しに用いられているおとぎ話のような言い回しである。この書き出しと呼応するようにして最後の場面があるとすれば、Salzman が象徴的な「死者」に向って祈りを捧げるという解釈もまた妥当であり、作品の構造的な工夫を明らかにするものでさえある。映画研究家のクリスチャン・メッツは、あらゆるフィクションの後ろには、第二、第三のフィクションがあると見て、次のように述べている。

物語の中での出来事は架空のことである。これが第一のフィクション。しかしだれも皆、その出来事が本当のことであると信ずる

ふりをしている。これが第二のフィクション。もうひとつ、第三のフィクションというのもある。心のどこかで、その出来事が本当に本当のことであると信じているのに、だれでもそれを正直に白状しようとしめないことである。<sup>14</sup>

Malamud もまた、“The Magic Barrel” という作品に、いわば「虚構性のかぎ括弧」を付けることで、逆説的に、その中に描かれた Leo の心的変遷や成長により一層の真実味を与えようとしたのではないだろうか。そして、本稿における考察で明らかになった通り、その変遷は、エディプス・コンプレックスという人間の根幹を成す事態と、その所産としてエスから分化し形成された自我や超自我に関わるものであり、親から生まれてきた子供、すなわちあらゆる人間に普遍的な真実（「本当に本当のこと」）に違いないのである。

### Notes

- 1 野口隆「マラマッドの『魔法の樽』の焦点化」湯気商船高等専門学校紀要第35号（2013年）、pp. 87-90.
- 2 Malamud, Bernard. “The Magic Barrel” . Kyoto. Rinsen Book. 1998. p. 193. 以降、この本からの引用については引用末尾の括弧内に頁数のみを示す。
- 3 Cheuse, Alan, and Nicholas Delbanco. *Talking horse : Bernard Malamud on life and work*. New York: Columbia UP, 1996. p. 85.
- 4 フロイト、ジークムント『フロイト著作集6 自我論・不安本能論』井村恒郎、小此木啓吾、他訳（人文書院、1970年）、p. 294.
- 5 *Ibid.*, p. 273.
- 6 フロイト、ジークムント『フロイト著作集3 文化・芸術論』高橋義孝他訳（人文書院、1969年）、p. 358.
- 7 *Ibid.*, p. 361.
- 8 フロイト、ジークムント『改訂版フロイド選集7 芸術論』高橋義孝・池田紘

一訳（日本教文社、1970年）、p. 304.

9 『著作集 6』 p. 281.

10 *Ibid.*, p. 295.

11 *Ibid.*, p. 273.

12 *Ibid.*, p. 277.

13 *Ibid.*, p. 291.

14 クリスチャン・メッツ 『映画と精神分析—想像的シニフィアン—《新装復刊》』  
（白水社、2008年）、p. 146.

## SYNOPSIS

### **The Reversal Oedipus Complex in *Ulysses***

Hiroki Matsuyama

Many critics have stressed the Oedipus complex as the structural principle of James Joyce's *A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916) and *Ulysses* (1922). It is true when the hero of the both is analyzed, Stephen Dedalus, who is a young boy. That is because Sigmund Freud analyzed a subject in the Oedipus complex in terms of one's relationship with a father and a mother. But another new hero of *Ulysses*, Leopold Bloom, who feels alienated from his family, has to be treated as a father in the Oedipus complex. E.H. Erikson's psychoanalytical ideas are proper to set the point of view of a father to the Oedipus complex. They will suggest that Leopold is growing up psychoanalytically although he has many problems resulted from the one between generations. According to Erikson, difficulties in our lives, especially the ones in a family like the Oedipus complex, are indispensable for the advance of the mind. Leopold's process to grow up psychoanalytically in *Ulysses* is a projection of the salvation of our isolation today, and Joyce's hope for Ireland and the world to improve peacefully.

## SYNOPSIS

### **The Psychological Connection between the Lady and Sabrina in *A Masque presented at Ludlow Castle, 1634***

Yui Oketa

This essay considers the connection between the Lady, a heroine and Sabrina, the water nymph as symbolical mother and daughter in John Milton's *A Masque presented at Ludlow Castle, 1634*, using C. G. Jung's *The Archetypes and the Collective Unconscious* (1971) .

This essay compares Comus, a sorcerer with the Lady, because they have in common with the connection with "mother". Comus depends on Cotytto and Hecate as the substitute mother, but when he notices the Lady's coming, he begins to be conscious of his mother, Circe, through the Lady's song. Although he attempts the unification of Circe and the Lady, he fails in his undertaking. Using Jung's ideas, the relationship between Comus and Circe seems to be like the Oedipus complex.

On the other hand, the Lady consistently continues to seek Christianized "chastity". Jung argues that when looking into the mirror of the water, anyone will face unpleasant things. But if they descend into the depths, that is, the unconscious, there is a good thing. Applying Jung's theory to *A Masque*, when the Lady sings a song which reminds us of "the mirror of the water", Comus appears before her as the unpleasant one. However, the Lady in order to be saved, consistently seeks the power of "chastity", which Sabrina symbolizes.

While Comus loses the connection with both mothers, the Lady recovers the connection with not only spiritual mother who has a relationship with no blood

ties, but her biological parents. The Lady believes the power of “chastity”, then she is connected with Sabrina unconsciously through Christianity.

## SYNOPSIS

### **The Dissolution of Oedipus Complex in *More Stately Mansions***

Kanako Matsuo

Eugene Gladstone O'Neill started writing a cycle in the early 1930s. Most plays of the cycle, except *A Touch of the Poet* and *More Stately Mansions*, were burned down by Carlotta Monterey, his third wife, before Eugene O'Neill died in 1953. *More Stately Mansions* is a sequel to *A Touch of the Poet*, in which Simon Harford struggles and longs for his mother Deborah's love. The relationship between mother and son, wife and husband, and mother and daughter-in-law is strongly developed, revealing the manifestation and dissolution of Oedipus complex in Simon toward his mother Deborah.

Simon and Deborah try to control mutually by depending as well as threatening, leaving readers a question: Do they both lack in fundamental trust each other? The psychical process of Simon and Deborah is discussed in this paper, adopting the psychoanalytical theory on the Dissolution of Oedipus Complex of Sigmund Freud.

## SYNOPSIS

### **Leo's Growth Inspired by the Idea of Salzman in "The Magic Barrel"**

Makiko Udou

So far, some have interpreted Bernard Malamud's "The Magic Barrel" as fantasy, although Malamud himself said that he had meant it to be realistic. In this paper, I examine this short story according to Freudian theory, keeping myself on the ground that it was meant to be realistic.

The aim of this paper, therefore, is to reveal the reason why Salzman has a fantastic air, and the kind of growth Leo had went through involved with some matchmaking affairs by Salzman.



## 研究ノート

## 精神分析・哲学・宗教の視点からの考察一例 — Four Quartets —

倉橋 淑子

論叢第31号では、『カクテル パーティ』における「自我の混沌」と「自己滅却」と題して考察した。今回は「精神分析学」、「哲学」、「宗教」三者の関係性を、エリオット (T. S. Eliot) の『四つの四重奏』を通して、今後の研究の方向性とも絡んで、より緩い概念としていくつかの論点、——「意識」(精神分析)、「弁証法的手法」(哲学)、「象徴としてのマンダラ画」(宗教)などをとり上げて論ずる。『四つの四重奏』は詩作品としてはエリオットの集大成ともいえる作品で四つの楽曲から成る。尚、四楽曲は「バート・ノートン」(‘Burnt Norton’, 1935)、「イースト・コーカー」(‘East Coker’, 1940)、「ドライ・サルヴェイジス」(‘The Dry Salvages’, 1941)、「リトル・ギディング」(‘Little Gidding’, 1942)、まとめて出版されたのは1944年である。

先づ、精神分析のキーワードともいえる、「意識」、「無意識」についてはユング (C. G. Jung) が「心の構造図」として解明している。(図1) (河合隼雄『カウンセリングの実際問題』誠信書房 1985, P. 62.) 自我は‘Ego’であり、意識の世界である。「自己」は無意識の世界であり、又可能性にみちた世界であるともいえる。この「無意識」の世界は、「個人的無意識」と「集合的無意識」(普遍的)から成る。ユングにおいて

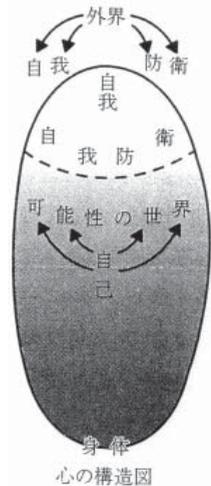


図1

は、この「集合的無意識」が大きな意味をもつ。一方、フロイト (S. Freud) は、図2 (井村恒郎・小此木啓吾訳『フロイト著作集6』人文書院 1982, P. 273.) に示すように「無意識」のエスを設定し、自我は、快感原則に支配される「エス」に対し、現実原則の優位性を保とうとする。又、自分の分化としての「超自我」の概念も重要であった。フロイトは、臨床に当たり、夢分析に、「心の構造」

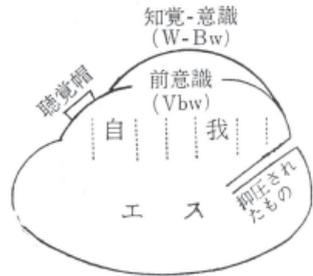


図2

- 「意識」の概念を適用して有効な結果を導いた最初の分析医であった。精神分析学者とは別に「心の構造モデル」を提示したのは、言語哲学、イスラーム哲学を専門とする井筒俊彦である (図3)。Aは表層意識、M、B、Cは深層意識領域であり、その中のCは無意識の領域である。Bは所謂ユングの集団的無意識の領域に該当し、MはAとBの中間地帯とする。これは、たしかにユングの「心の構造図」と基本的に類似している。(井筒俊彦『意識と本質 精神的東洋を求めて』岩波書店 1982, p. 222. 参照)

心の構造モデル

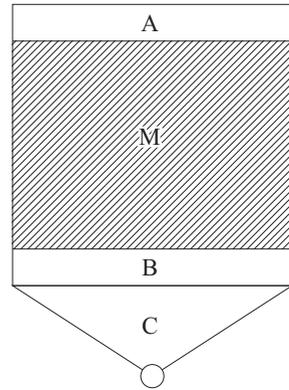


図3

精神分析学の対象である「心」は今や学問の枠を越えて他分野の学問でも大きな関心をもって研究されている、ということがわかる。井筒は上掲書で、「20世紀はあらゆる学問は意識の多層的実在であることを無視することはできなくなる。」とのべている。今や精神分析学、哲学という学問の枠では、はまり切れない「人間の魂」の学際的研究の浸透傾向が加速していることをうかがわせる。井筒の論をもう少しつきつめて考えていけば、「意識の主体」は何か、という本質論に遡ることになる。同様に意識の客

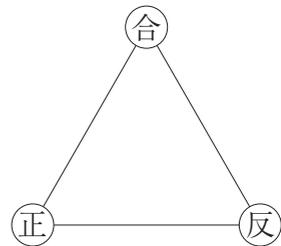
体についても同じことがいえるのではないか。今後の課題としてその哲学的命題をより深く認識することで、ユング、フロイト、その他精神分析学者のいう「意識」「無意識」の考察もより緻密なものになっていくだろう。

ここで具体的に『四つの四重奏』における意識の問題について考えてみたい。この作品はすでにのべたように、哲学的、宗教的色彩の強い詩であり、それだけに「魂」の分析も深い洞察力と広汎な知識が求められるので、詩の分析は難解であるといわざるを得ない。エリオット自身の複雑かつ縦横な意識の流れが淀みなく展開されていく。ゆたかな感性と伶俐な知性にみちた詩行は、徒に感情や情緒に墮することはない。エリオットは、『伝統と個人の才能』（T. S. Eliot. *Selected Essays* “Tradition and the Individual Talent” Faber and Faber, 1980, P. 21.）の中で次のようにのべている。

‘Poetry is not a turning loose of emotion, but an escape from emotion; it is not the expression of personality, but an escape from personaity.’ ‘escape’の向う側にどういふ新しい世界が広がるのだろうか。上記に続く文は、‘But, of course, only those who have personality and emotions know what it means to want to escape from these things.’である。エリオットはあくまで辛辣で読者を油断させることはない。それ故にこそ興味をつきない詩人であるとも言える。「意識」というテーマについて具体的に考えてみると、例えば「バート・ノートン」の‘Towards the door we never opened / Into the rose garden.’の「バラ」と最終楽曲「リトル・ギディング」の最終行‘And the fire and the rose are one.’の「バラ」は同じ「バラ」として意識されているのか、もし異なるとしたらどう違うのか、エリオットは「言葉」の意味の深さをわれわれに呈示している。最初の「バラ」と最後の「バラ」の意味の乖離は、とりも直さず「意識」の変化であり、その変化の分析が、本作品の意図を汲む上で極めて重要なポイントといえる。

次に哲学的視点からのアプローチとして本作品の一貫した主要テーマである「時」についてとり上げる。冒頭は、‘Time present and time past/ Are

both perhaps present in time future, / And time future contained in time past.’ で始まる。「現在」「過去」「未来」のありようとその関係が比喩的かつ象徴的に語られる。一方、本作品の際立った逆説的表現の多様性、又その多用は屢々読む者を混乱させるが、この表現の奥にあるものを——その心を——読みとり、その心理を分析することがエリオットの思想をより深く感ずることにつながる。例えば「バート・ノートン」IIの‘Neither flesh nor fleshless; / Neither from nor towards; at the still point, there the dance is, / But neither arrest nor movement.’ などその一例である。エリオットがここで展望する世界は、少なくとも日常を超脱した抽象の世界、思索の世界、いわば哲学的思考の世界であり、これはきわめてエリオットの的であり、彼自身の「意識の流れ」に沿うものである。逆説的表現に加えて所謂並置 (juxtaposition) については、今後とも分析に値するテーマである。‘movement-stillness’, ‘darkness-light’, ‘plenitude-vacancy’ などその他多くの例があげられる。内容は勿論のこと選びぬかれた言葉のもつ適正さと美しさが、読者の心的状況に直截的に届けられる。尚、哲学的アプローチという視点でいえば、具体例として「時」の概念における過去、現在、未来については一つの解釈としてヘーゲル (G. W. F. Hegel) の弁証法の考え方を適用してみたい。つまり、右の図に示す「正」「反」「合」の世界である。仮に「正」を過去、「反」を未来とし、「合」を現在と考えれば、自己の中に内在する「過去」、「未来」は止揚されて「現在」となる。『四つの四重奏』の詩句でいえば、‘Time past and time future / What might have been and what has been / Point to one end, which is always present.’ (「バート・ノートン」I) である。本作品の最後の楽曲である「リトル・ギディング」には、次のような詩行がある。‘Here, the intersection of the timeless moment’ という「時」に対する異なった次元からの描写である。ここでは「過去」



「現在」も「未来」も超克され、いわば「時」からの自由、「時」からの解放の世界——「時」とは無縁の世界がくり広げられる。「時」に対するこの大きな隔たりは何に起因するのか、その間のエリオットの心象風景について、ユングはどう説明するか、それも新しいテーマとしてとらえたい。

最後に宗教的視点から、『四つの四重奏』が最終的に辿りついた世界について「マンダラ」との関連で考察する。マンダラとは、簡単に言えば「心を描いた画」と言えるだろう。その原点は「密教」である。定義としては諸説あるが底通している考え方は、「本質的なもの」を画に描いたもの、言葉や文字では充分つくせない、深層心理学的にみた「心のかたち」ともいえるであろう。「曼荼羅は坐禅をして、自分の心の中にあらわれたもの、いわゆる観想の中に出てきたものなのです。」と松長有慶は言っている。(松長有慶 編『曼荼羅 色と形の意味するもの』大阪書籍 1988. P. 17.) 従ってフロイト、ユングなど深層心理学者といわれる精神分析学者は、患者に積極的に画で表現する治療を導入している。例えばフロイトはこの手法を「夢分析」に用いて有効性を確認、又ユングは初期の患者に画で自分の心を表現させ、その画から深層心理を把握、分析、更に対話等による治療を重ねながら何枚かの画を描かせ、完全治癒といえる状態に回復した時、患者自身の描いた画は、患者自身の「マンダラ」となっていた、という多くの症例を残している。分析に当たってユングは稲妻、光、花（バラ、水蓮等）、動物（蛇、カニなど）をシンボルとして使用している。エリオットも又『四つの四重奏』に限らず、多くのシンボルを作品の中で使用している。例えば、ユングの「稲妻」「光」「バラ」などは、彼にとって重要なシンボルであった。例えば『四つの四重奏』より前（1930）に発表された『聖灰水曜日』（*Ash Wednesday*）には次の一節がある。  
 ‘The single Rose / Is now the Garden / Where all loves end / Terminate torment / Of love unsatisfied / The greater torment of love satisfied / End of the endless / Journey to no end’ これに続いて ‘Grace to the Mother’ / For the Garden / とあ

り、『四つの四重奏』の冒頭の‘rose garden’はこの時点ですでに全く異質の‘Rose Garden’へと止揚されていたことがわかる。エリオットの「マンダラ」はおそらく中央に浄化の焰と一体化したバラの咲く静謐の世界のマンダラ画となるのだろう。

「マンダラ画」は宗教をその始祖とするものではあるが、「人間の深層心理」の表現という点では、必ずしも「宗教」の世界だけに限定されるものではなく、現代では一般の人々がマンダラに寄せる思いが強い。広く、東洋の人々のみならず世界の人々の関心がマンダラに集まっているのは、世界的な不安、閉塞感など、そして又それぞれの国の抱える経済、宗教上の軋轢から逃れて真の心の平穏を求めている現象であるともいえよう。人は、様々な思いを昇華して自分にしか描けない「自分のマンダラ」を描こうとしているのかも知れない。

## 執筆者紹介

### イギリス文学

(学術論文) 松山 博樹 東洋大学 非常勤講師

(学術論文) 桶田 由衣 日本大学大学院 文学研究科  
英文学専攻 博士後期課程 2年

### アメリカ文学

(学術論文) 松尾かな子 熊本高等専門学校 熊本キャンパス准教授  
(熊本電波工業高等専門学校を 2009 年に改名)

(学術論文) 有働 牧子 熊本県立大学 非常勤講師

### 研究ノート

倉橋 淑子 元 昭和女子大学 教授

## サイコアナリティカル英文学協会

[1974(昭和49)年7月20日創立]

## サイコアナリティカル英文学会

[1983(昭和58)年4月1日改称]

初代名誉会長 大槻 憲二

第2代名誉会長 (初代会長) 今田 準造 (創立者)

第3代名誉会長 望月 満子

### 1. サイコアナリティカル英文学会

〒752-0997 山口県下関市前田2丁目27-43

会 長：小園 敏幸 TEL 090-8297-0729

事務局長：小城 直子 TEL 080-3978-1913

E-mail : okojon3.14159@iwk.bbiq.jp

ホームページ : psell.sakura.ne.jp

### 2. 役員 [任期3年:2014年(平成26年)4月1日~2017年(平成29年)3月31日]

顧問：林 暁雄

会 長：小園 敏幸

副 会 長：木村 保司、倉橋 淑子

常任理事：金丸 千雪、木村 保司、倉橋 淑子、小園 敏幸、  
湯谷 和女、横田 和憲

理 事：会田 瑞枝、伊藤 太郎、金丸 千雪、木村 保司、  
倉橋 淑子、小城 直子、小園 敏幸、鈴木 孝、  
町田 哲司、湯谷 和女、横田 和憲

会計監査：有働 牧子、松尾かな子

運営委員：有吉登志子、石田美佐江、有働 牧子、金丸 千雪、  
小城 直子、佐々木英哲、鈴木 孝、中尾香代子、  
松尾かな子、湯谷 和女

論叢編集委員：飯田啓治朗、倉橋 淑子、小園 敏幸 (編集長)、  
佐々木英哲

事務局長：小城 直子

# サイコアナリティカル英文学会会則

## 第1節 総 則

- 第1条 本会は、サイコアナリティカル英文学会という。
- 第2条 本会は、本部を会長の本務校又は自宅に置く。  
事務局については、別途理事会において決定する。

## 第2節 目的と事業

- 第3条 本会は、精神分析学の立場から、英米の言語及び文学を研究することを目的とする。
- 第4条 本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
1. 学術研究会、講演会
  2. 会誌の発行
  3. その他、本会の目的を達成するために必要な事業

## 第3節 会 員

- 第5条 本会の会員は、次の通りとする。
1. 本邦大学課程またはそれに準ずる教育を受けた者及び相当教育機関の在籍者で、本会の目的に賛同する者を会員とする。会員は維持会員および一般会員で構成する。維持会員は会員の中の有志とする。
  2. 本会に功績のあった者で会長が役員会に諮って推挙する者を名誉会員または賛助会員とする。
- 第6条 本会に入会を希望する者は、所定の申込書を事務局に提出し、理事会の承認を得なければならない。
- 第7条 会員は、本会の開催する学術研究会において研究発表をすることができる。

第8条 会員は所定の会費を納入しなければならない。

名誉会員は会費を納入することを要しない。

第9条 年会費は維持会員1万円（内、5,000円は寄付）、一般会員5,000円。

但し、大学院生は2,500円とする。

第10条 退会を希望する者は、退会願いを事務局に提出し、理事会の承認を得なければならない。

#### 第4節 運 営

第11条 本会には役員として会長1名、副会長2名、会計監査2名、常任理事、理事及び運営委員、論叢編集委員若干名を置く。

尚、名誉会長及び顧問を置くことができる。

第12条 （理事） 理事は会員の推挙により選出する。

第13条 （常任理事） 常任理事は理事の中から推挙により選出する。

第14条 （会長） 会長は常任理事の中から推挙により選出する。

第15条 （副会長） 副会長は会長が常任理事の中から選任する。

第16条 （運営委員） 運営委員は会員の中から推挙により選出する。

第17条 （会計監査） 会計監査は会員の中から推挙により選出する。但し、2名のうち少なくとも1名は理事を兼ねることができない。

第18条 （『論叢』編集委員） 『論叢』編集委員は会員の中から推挙により選出する。

第19条 （役員会） 会長は必要に応じ役員会を招集する。

第20条 （理事会） 会長は原則として年1回理事会を招集する。  
会長は前項理事会に必要な応じ運営委員の出席を求めることができる。

第21条 （常任理事会） 会長は随時常任理事会を招集することができる。

会長は前項常任理事会に必要な応じ運営委員の出席を求めることができる。

常任理事会の決議事項は理事会の議を経て効力を発するものとする。

第22条 役員任期は3年とし、重任を妨げない。

第23条 本会の経費は年会費、寄付金その他を以て賄う。

第24条 本会は年1回総会を開き、役員決定、年会費決定、事務会計の報告等を行う。総会に続いて、学術研究会を開催し、会員の研究業績の発表及び討議を行う。

第25条 本会則の変更は、理事会の審議を経て総会に提出され、総会出席者の3分の2以上の賛成を得なければならない。

補則 本会則は昭和49年7月20日より施行する。

昭和49年12月1日 第1回大会 改正

昭和51年12月5日 第3回大会 改正

昭和52年12月4日 第4回大会 改正

昭和53年12月3日 第5回大会 改正

昭和54年12月1日 第6回大会 改正

昭和55年12月6日 第7回大会 改正

昭和57年12月4日 第9回大会 改正

平成3年11月9日 第18回大会 改正

平成8年10月19日 第23回大会 改正

平成9年10月4日 第24回大会 改正

平成12年9月30日 第27回大会 改正

平成14年10月5日 第29回大会 改正

平成16年10月5日 第31回大会 改正

平成23年10月22日 第38回大会 改正

## 『サイコアナリティカル英文学論叢』 投 稿 規 定

1. 投稿論文は未発表のものであること。ただし、口頭発表はその旨を明記すれば可。
2. 内容は精神分析学の立場から、英米の言語及び文学を研究した論文であること。
3. 応募者は本学会会員であること。
4. 原稿（論文及び英文シノプシス、書評）は全て、パーソナルコンピューターによること。審査用として、プリントアウトしたものを4部（コピー可）提出し、英文によるシノプシス（200語程度）4部を添付すること。（書評の場合には、英文シノプシスは不要である。）

論文の書き方の大枠については、次の通りである。

- (1) 本文の後には、Notes の項目のみ設ける。Bibliography や Works Cited の項目は設けない。
- (2) 「注（註）」は Notes とする。
- (3) 短い引用文（Two sentences 以下）の場合は、Double quotation marks（“ ”）でくくって、地の文の中に入れる。その出典が地の文の中に明示されていない場合には、closing mark（”）の右上肩に番号を打って、Notes の中で出典を明示する。
- (4) 長い引用文は、地の文と区別し、indent し、この quotation と地の文との space は double space とする。
- (5) Notes には、次の略語を使用する。

*ibid.* . . . . 同一著者の同一著作に連続して言及する時に用いる。

*op. cit.* . . . 著者 (surname) と page number は必ず示す。

*loc. cit.* . . . 同一著書の同一頁から連続して引用する場合にのみ用いる。

- (6) シノプシスには英文のタイトルとローマ字による執筆者の氏名を記入すること。
5. 原稿の採否および掲載の時期は編集委員会が決定する。
  6. 執筆者は編集委員から採用の連絡があり次第、電子メールによる添付ファイルにて原稿を事務局に送付すること。(またはフロッピーディスク、メモリースティック或いはCD等による提出も可。)
  7. 採用論文の執筆者は論叢印刷費用の一部を負担する。詳細は内規による。
  8. 原稿の締め切りは9月末日とする(厳守のこと)。
  9. 論叢発行の際に、執筆者には抜刷30部が送られる。

#### 付記

学会の依頼による執筆の場合は、この規定を適用しない。

この規定の他に、『サイコアナリティカル英文学論叢』に関する内規を別に定める。

## サイコアナリティカル英文学会の 図書出版に関する規定

本学会は「著作が精神分析学の立場から英米の言語や文学を研究している」場合に、執筆者の申し出により可能な限りのサポートをする。(執筆者は本学会会員であること。)

1. 編集委員が著作の査読を行い、必要に応じて助言し、著作内容の一層の充実のために協力する。
2. 印刷会社については原則として執筆者が直接交渉するものとするが要望があれば、紹介等の便宜をはかる。
3. 完成本については、学会に献本するものとする。

## 編集後記

小園敏幸

『サイコアナリティカル英文学論叢 第34号』は、当学会の第2代会長の望月満子先生及び第3代会長の山本昂先生の追悼号になりました。第2代会長の望月満子先生は2013（平成25）年4月11日に95年10か月余の生涯を終えられ、第3代会長の山本昂先生は2013（平成25）年12月19日午後3時46分、肺炎のため千葉県野田市の病院で逝去、88歳でした。お二人の当学会でのお働きがなければ、現在のような堅実な学会の存続はなかったかもしれません。望月満子先生も山本昂先生も共に敬虔なキリスト教徒でありました。お二人の先生方の御魂が安らかにお眠りなされることを心からお祈り申し上げます。

さて、平成25年度は第40回という節目の大会でありましたので、当学会創立以来の懸案事項であったシンポジウムを開催しました。

今回のテーマは Sigmund Freud (1856~1939) の思想の主要命題の一つである Oedipus complex にしました。司会は愛知文教大学の金丸千雪先生、パネリストの野呂有子先生（日本大学）、松山博樹先生（東洋大学）、森岡稔先生（星城高校）、松尾かな子先生（熊本高等専門学校）、有働牧子先生（熊本県立大学）の5人に夫々取り扱う専門分野の英米文学作品について、具体的にはイギリス文学が2作品とアメリカ文学が3作品で夫々の梗概を中心に両親と子供の三者関係の葛藤に焦点を当てて作品のテーマや登場人物の心理描写を考察し発表していただきました。Oedipus complex は陽性の型と陰性の型があり、陽性型は「息子と母親との関係」と「娘と父親との関係」（Electra complex）ですが、今回、パネリストが扱った作品に陰性型、所謂同性愛をテーマにしたものがなかったことが少々残念で

した。実際にはその両者の間には様々な度合いの混合型があり、Oedipus complex の解消のされ方が性格形成やスーパーエゴの形成や人間の欲望の方向付けに重要な関連を持っております。

大会 40 回目にして初めてのシンポジウムが成功・盛会裏に終わることができました。司会の金丸先生及びパネリストの野呂先生、松山先生、森岡先生、松尾先生、有働先生に改めて深謝申し上げます。

[会員による著書紹介]

飯野朝世先生（博士 言語文化：関西外国語大学）

『今こそフロムに学ぶ』（朝日出版社、2014年3月14日発行）

（定価：1,600円＋税）

本書の帯からの引用：「<今 フロムから何が学べるか、何を学ぶべきか> 21世紀の混沌たる現実は、全て20世紀に胚胎している。本書はその最も犀利な分析方法の一つを、明晰に示すものとして、必ずや読者に益するところが大きいと信じる。」

——— 大阪市立大学名誉教授 佐藤全弘氏 序文より



サイコアナリティカル英文学論叢

——英語・英米文学の精神分析学的研究——（第34号）

---

---

発行者 サイコアナリティカル英文学会  
会長 小園 敏幸

印刷所 (株)啓文社 〒861-3102 熊本県上益城郡嘉島町下六嘉1765  
TEL 096 (368) 8100 FAX 096 (369) 2677

発行所 サイコアナリティカル英文学会  
〒752-0997 山口県下関市前田2丁目27-43  
会 長 小園 敏幸 TEL 090-8297-0729  
事務局長 小城 直子 TEL 080-3978-1913  
E-mail : okojon3.14159@iwk.bbiq.jp  
ホームページ : psell.sakura.ne.jp

郵便局の青色の「払込取扱票」について  
口座番号：01500-9-28949  
加入者名：サイコアナリティカル英文学会

---

---

2014（平成26）年3月20日発行

